

| | |
|------------------|---|
| Title | 『韻府群玉』版本考(二) |
| Sub Title | Comparative study of the printed edition of the Yùn Fǔ Qún Yù (2) |
| Author | 住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 2001 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.36 (2001.) ,p.403- 446 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平澤五郎名誉教授追悼記念 挿図 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20010000-0403 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

*注記・・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合せ下さい。

『韻府群玉』版本考(二)

住吉朋彦

前稿(『韻府群玉』版本考(一))、『斯道文庫論集』第三十五

本稿に於ける補正は、以下の四章に分けて行いたい。

輯・平成十三年二月、以下同)校了後、前稿中に収めるべきで

あった知見の幾つかを加え、又新たに訂正すべき諸点を見出し

(一) 前稿掲載の版種に含まれる伝本拾遺

たので、本稿には先ずそうした事柄を記して前稿の遺漏を補正

(二) 前稿未掲載の版種並に伝本解題

し、併せて次稿への接属を提示したい。前稿に掲載すべき範疇

(三) 諸版本の関係について(再説)

としたのは、当該『韻府群玉』諸本の中、本文に『説文解字』

(四) 新增説文本の成立について

の記事や直音注等の増入を含まない無修本諸版、具体的には元

元統二年(一三三四)梅溪書院刊本及び同本の覆刻諸本(本稿

甚だ不体裁の仕儀ではあるが、適宜〔〕内に注記した前輯

には、これらが無修一〇行本等と称する)に関する事柄であつ

頁数を参考して頂き、大方の御賢察を賜ることとしたい。

たが、その枠組み自体にも不足の所があつた。

(一) 前稿掲載の版種に含まれる伝本拾遺

韻府羣玉二〇卷

〔前輯三四六頁〕

元陰時夫(時遇)編 陰中夫(幼達)注

元統二年(一三三四)刊(梅溪書院)

〔¹〕中国国家図書館(マイクロフィルム)七八四九 二〇冊

伊沢蘭軒・徐乃昌旧蔵

表紙法量、染色等不明(原紙約二四・五×一五・一釐²)。襯紙
改装。毎卷一冊。

同版の東北大学附属図書館狩野文庫蔵本には劣ろうが、市立米
沢図書館蔵本よりはやや早印か。

欄外に墨書校字注あり。首に単辺方形陽刻「伊澤氏/酌源堂/
圖書記」朱印影(伊沢蘭軒所用)、その他四種不明朱印影、凡
例首に単辺方形陽刻「積學齋」朱印影、事目首に同「南陵/徐
氏」朱印影、目錄首に同「南陵徐乃昌/校勘經籍記」朱印影、
第六卷首に同「積學齋徐乃昌臧書」朱印影(以上四種徐乃昌所
用)、目錄尾に同「六合徐氏/孫麒珍臧/書畫印」朱印影、卷

首に同「東華/劉占洪/字□山臧/書之印」朱印影、第一卷尾
に無辺方形陰刻「孫麒□氏/傳□□得」朱印影、第二卷首に單
辺方形陽刻「劉占洪/鑒堂」朱印影、第五卷尾に無辺方形陰刻
「劉印/占洪(劉占洪印)」朱印影を存す。

徐乃昌旧蔵の本書元刻本に上海図書館現蔵の又一本を存する
が、こちらは元統二年梅溪書院の牌記を有するものの巻首別版
で、恐らく本版後修以降の印行と思われる。但し補刻の部位等
の詳細は未調査。上海の本には室町期邦人の書入があり、北京
の本と共に、もとは日本伝来のものである。

〔中国国家図書館(マイクロフィルム)一八六三五のうち〕

卷六補配(元至正十六年刊)新增説文本 乾隆御覽之寶
第十五卷は当該の版(二冊のうち一冊)。詳細次稿。

又 逋修

〔前輯三五二頁〕

〔布施美術館 一三三八、C〇五〇・一八のうち〕

欠卷十五・十六

卷一、十二、十七、十八補配(明洪武八年序)刊本

第十三・十四卷は当該の版（九冊のうち一冊）。第十三卷第一張を欠く。なおこの版の第十三・十四卷は去声一送韻から十二震韻まで（平水韻）を収め、「明洪武八年序」刊本第十三・十四卷も一送韻から八震韻まで（洪武韻）を収める筈であるが、細説すれば洪武韻の八震韻は平水韻の十二震韻と十三問韻を合したものであり、少なくとも第十五卷までは本版を以て宛てなければ問韻を欠くこととなってしまふ。従つて合理的に考えるならば、現在欠けている第十五卷は（恐らく第十六卷も）当該の版であつたかと予測されるが審かでない。詳細後掲。

又 三修

〈国立国会図書館 WA三五・二五のうち〉

卷一・二、四・十二、十九卷補配〈元至正十六年刊〉新

増説文本 卷三補配元至正二十八年刊本

第十三・十八、二十卷は当該の版（一〇冊のうち半、二、半冊の都合三冊分）。第十七卷第十五・三十一張を第十八卷の第三十九・四十張間に措く誤綴がある。この本は通修本より更に後印で、第十三卷第十一・十二張には新たに補刻を存するので、

第三修と称すべきものであろう。

稀に室町期の朱筆を以て圈豎傍句点、磨滅部補鈔、同墨筆を以て欄上補注書入を存す。また第十四卷尾「天龍三関寮公用」

應永丙戌周明置之、第十八卷尾「天竜三関寮公用」應永十三年閏六月廿九日周明置之、第二十卷尾「天龍三関寮公用」應永十三年龍集丙戌閏六月廿九日周明置之の墨識あり。三関寮は京・天龍寺内に設けられた公寮で、書記職の僧が使用した（『扶桑五山記』）。応永十三年（一四〇六）閏六月二十九日に周明と称する者が天龍寺三関寮にこれを施入したというのであろうが、その何者であるかを審かにしない。周の字は臨濟宗夢窓派の系字として知られる。他冊にこの識語はないから、後に補配されたものと判る。詳細次稿。

本版については、又本稿（四）章を参照されたい。

同

〔前輯三三三頁〕

元至正二十八年（一三六八）刊（東山秀岩書堂）

拠元統二年刊後修本

〈国立国会図書館 WA三五・二五のうち〉

卷一・二、四〇十三、十九補配〔元至正十六年刊〕新增

説文本 卷十四〇十八、二十補配元統二年刊通修本

第三卷は当該の版（一〇冊のうち半冊）。室町期の朱筆を以て
堅句点、磨滅部補鈔、欄上補注、校注、又別手の朱墨を以て破
損部磨滅部補鈔書入を存す。尾に無辺方形陰刻不明朱印影を存
す。詳細次稿。

〔龍谷大学大宮図書館〕〇二一・四二・二〇のうち

卷一〇十、十三〇二十補配〔元至正十六年刊〕新增説文

本 題簽〔利峰〕東鋭筆

第十一・十二卷は当該の版（二〇冊のうち二冊）。首に単辺円
形陰刻「監／翁」朱印影を存す。詳細次稿。

同 〔前輯三五八頁〕

〔日本南北朝〕刊 覆元元統二年刊本

〔堺市立中央図書館〕〇三六一・一 一〇冊

欠卷十一 卷十二補配同版後印本 鹿苑寺旧蔵

第一〇十、十三〇二十卷を存す。後補洪引漉目表紙（二四・三

×一五・四糧）左肩打付に「韻府群玉」「幾之幾」と、右

肩より打付に同筆で声、韻目を書す。天地截断。本文料紙は薄
手の楮打紙で、同版本中に例を見ない。冠水。虫損甚し。

比較的早印の部類で、大東急記念文庫蔵本と同程度の摺り。

ほぼ全張に互り室町期かと思われる朱筆を以て圈豎傍句点、稀
に欄上校注書入あり、第十九卷にて途絶。極稀に同墨筆を以て
料紙破損部補鈔、欄上補注書入あり。

每冊首に単辺方形陽刻「鹿苑寺」朱印影、同「荒陵／山房」朱

印影、無辺方形陰刻「荒陵／清秘」朱印影、每冊前表紙に単辺
方形陽刻「坊郡□現過眼」並に寺院図様朱印影、同題下に単辺
小判形陽刻「奥」朱印影、同見返しに単辺方形陽刻「東門／守
入」朱印影を存す。

〔秋田県立図書館〕一九・一 二〇冊

新補香色「秋田図書館蔵」文打出艶出表紙（二四・二×一五・

九糧）左肩及辺摺梓題簽を貼布して「韻府群玉」「幾」と書
し、中央にも方簽を貼布して同筆で韻目を書す。これらは旧簽
を流用したものと思われる。裏打改装。天地截断。包角。每冊
一卷。第八卷第三十一、三十張を誤綴す。

本品の摺りは比較的早く、神宮文庫蔵本と同程度である。

室町期の朱筆を以て圈豎傍句点、校注（第五卷以降は稀）、稀に室町期と思われる墨筆を以て補注、また近世期の朱墨を以て欄上標字注書入あり。首に方簽を貼布して「經籍訪古志云」以下引文を墨書す。

每冊首に単辺方形陽刻「學校」朱印影を存し、これに無辺陽刻「明治三十年 月 日購入」朱印を重鈴、同空格に「六」「四」「十五」と墨書す。

〈京都大学附属図書館 一〇一〇一・イ・三のうち〉

卷一、三、二十補配明万曆十八年序刊通修本

第二卷は当該の版（一〇冊のうち半冊）。朱筆を以て豎句訓点、音訓送仮名、磨滅部補鈔書入を存す（他冊と同筆）。詳細次稿。

〈堺市立中央図書館 〇三六一・一のうち〉

欠卷十一 卷一、十、十三、二十補配同版早印本

鹿苑寺旧蔵

第十二卷のみ同版後印本による（一〇冊のうち一冊）。当該巻の印面は他巻に遅れる他、当該冊のみ薄手の料紙を用いない。

但し表紙、書入、印影其他冊に共通であることから、この補配が行われたのは相応に早い時期のことであるらしい。詳細前掲。

同

〔朝鮮初期〕刊 覆元元統二年刊本

〔前輯三六三頁〕

〈布施美術館 一一四三〉

一〇冊

卷一・二補配〔朝鮮前期〕刊早印本

卷十三・十四補配〔朝鮮前期〕刊後印本 奎章閣本

後補洪引表紙（二五・七×一五・六糎）左肩打付に「韻府群玉」と書し、右肩より打付に同筆で声目（朱）、韻目（墨）を書す。首冊前表紙に元刻本との審定を記録した大正十五年の墨書方簽を貼附してある。序、目録、事目、凡例の順に綴して本文。每冊二卷。

朱筆を以て豎句点、校注及び磨滅部補鈔、首のみ墨筆を以て版心上標柱、標字注書入を存す。

第十四卷第八張後半及び同三十七張の欄上に数点の銅活字試印あり。後から鈴したというより、その反故を料紙に用いたものと解され、内府での印行を思わせる。字種未詳であるが本版成

立の上下限を知る可能性もあるので続考を期したい。

第五、九、十五、十七、十九巻首に単辺方形陽刻「經／筵（李朝奎章閣所用）」朱印影、第一巻首無辺方形陰刻不明朱印影、毎冊首単辺方形陽刻「天野氏」朱印影を存す。
布施卷太郎氏（明治）四十五年頃購入本である。

同

〔朝鮮前期〕刊 覆〔朝鮮初期〕刊本

〔前輯二六五頁〕

〈中国国家図書館 一〇一四七〉

二〇冊

林羅山旧蔵

新補香色表紙（二六・三×一六・三糎）。天地截断。虫損修補。
新補見返し及び前副葉三枚。次で古素紙書扉、右肩より邦人の手跡にて韻目を列挙す。羅山には非ざるか。序第一張欄上に「前」と、同第二張欄上に「後」と墨書（本来誤綴で改装時に改めたものか）。首目には序、目録、事目、凡例の順に綴して本文。毎冊二巻。他本に徴してこの形が原装と思われる。
極早印で、同版本中でも最も摺りの良い部類に含まれよう。
朱筆を以て合圈豎句訓点、欄上標韻、墨筆を以て傍線、又別手

墨筆を以て標字注記書入。第二巻第三十一張にも近世期邦人と
思われる別手朱墨にて補注書入を存す。

序第二張首（改装前は全部の首か）に双辺方形陰陽刻「江雲潤樹」朱印影（林羅山所用）、書扉韻目下方に無辺方形陰刻「松隱／堂」朱印影、単辺方形陽刻「松原／文庫」朱印影、無辺方形陰刻「朝生子□」朱印影（以上三種連鈴）、序首に単辺方形陽刻「南宮邢氏／珍藏善本」朱印影、同「邢印／生龜（邢生龜印）」朱印影（連鈴）を存す。

〈陽明文庫 イ三〇〉

一〇冊

淡茶色雷文繫地蓮華唐草文空押艶出朝鮮表紙（二七・七×一七・〇糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書し、右肩より打付に韻目を書す。下小口、声韻目・冊序数、又線内「玉」と書す。五針眼釘。天地截断せざるか。首目には序、目録、事目、凡例の順に綴して本文。毎冊二巻。
比較的摺りの良い部類で、大東急記念文庫蔵本に次ぐ。
毎冊首単辺方形陽刻「近衛藏」朱印影を存す。
間々料紙の表裏に李朝官署大方朱印影の一部を存し、また紙背には進士の名と世系を細書した文書を多く用いてある。二、三

の例を示せば「進士 崔□ 本□□／父振威將軍前行忠□衛司
 憲兼宣傳官 汝漑／祖禦侮將軍行馬□水軍僉節制使睿／曾祖通
 訓大夫行司憲府監察 文孫／外祖通訓大夫行法□□監許雲本琴
 川」(第三卷第五十七張)、「進士趙怡 本淳昌／父勳節校尉
 大成／祖通訓大夫行泰仁縣監 淑瓘／曾祖朝散大夫尚瑞院副直
 長 穩／外祖忠義衛禦侮將軍行忠佐衛副護軍馬世駿 本長興」
 (第十九卷第二十六張) 等である。このうちの進士崔氏某とは、
 『国朝榜目』に拠れば、汝漑の子で宣祖朝の壬午の年(一五八
 二)に及第した濂、洙の兄弟か同乙酉(一五八五)の年に及第
 した沂の何れかと思われ、当該伝本の印行は宣祖朝十五年(一
 五八二)以降のことと判明する。のちにわが国へ齎されたこと
 を考えると、その時期はあまり降らないのではないかと思われ、
 又該本は比較的早印であるから、その刊刻自体も大きく遡らな
 い十六世紀後葉のことかと推される。
 又当該伝本の第一卷第十四・十五張間に唐本の韻書残片四半葉
 を挟んであるが、これは『古今韻会举要』(元)刊本の第三十
 卷第二十一張前半の上半に相当する。

〈布施美術館 一一四三のうち〉

卷三十一・十二、十五・二十補配〔朝鮮初期〕刊本

卷十三・十四補配〔朝鮮前期〕刊後印本

第一・二卷のみ当該版の早印本による(一〇冊のうち一冊)。

本文厚手楮紙。本冊には「經／筵」印影なし。詳細前掲。

〈布施美術館 一一四三のうち〉

卷三十一・十二、十五・二十補配〔朝鮮初期〕刊本

卷一・二補配〔朝鮮前期〕刊早印本

第十三・十四卷のみ当該版の後印本による(一〇冊のうち一冊)。

この冊には厚手の料紙を用いず、印面中に接続の紙葉がある。

本冊にも「經／筵」印影なし。詳細前掲。

同 一八卷

〔前輯三六七頁〕

〔明洪武八年(一三七五)序〕刊〔南監〕

拠元統二年刊本 亡名改編

本版については前稿に、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の

元統二年刊本中に補配された第十五卷のみによって著録した

が、その後の一四卷分を存する後掲の伝本に接し得たので、本

稿には少しく記述を補って置きたい。但しこれも、巻の首尾数張を欠くことの多い本で十全とは言い難いが、今判明する点のみを記して後考を俟ちたい。

卷首「韻府羣玉卷之幾」と題し、声目は欠く（第八卷のみ墨罍陰刻にて存す）。前稿に記した如く、本版は無修一〇行本の款式によりながら行を前後に動かして洪武韻の順に改編し、切り接ぎ部では本文に加減を施して辻褃を合せてある。また韻目を一〇六韻から七六韻に合併した関係で巻数を一八巻に減じてある。従って、無修一〇行本と体式、行字数を同じくしながら、毎巻の張数や排行を異にしている。以下に大まかな結構を示す。

| | | | |
|-----|-------|------|-------|
| 第一卷 | (二六張) | 平声 | 一東韻 |
| 第二卷 | (四二張) | 二支 | 三齊韻 |
| 第三卷 | (六七張) | 四魚 | 七灰韻 |
| 第四卷 | * 1 | 八真 | 十刪韻 |
| 第五卷 | (七二張) | 十一先 | 十四歌韻 |
| 第六卷 | * 2 | 十五麻 | 十七陽韻 |
| 第七卷 | (四九張) | 十八庚韻 | |
| 第八卷 | (五三張) | 十九尤 | 二十二塩韻 |

| | | | | |
|------|--------|-----------------|-------|-------|
| 第九卷 | (五二張) | 上声 | 一董 | 四語韻 |
| 第十卷 | (四五張) | | 五姥 | 八軫韻 |
| 第十一卷 | (五四張) | | 九早 | 十七養韻 |
| 第十二卷 | (四二張) | | 十八梗 | 二十二賺韻 |
| 第十三卷 | * 3 | [去声] | 一送 | |
| 第十四卷 | * 4 | | | 八震韻 |
| 第十五卷 | (四九張) | | 九翰 | 十四箇韻 |
| 第十六卷 | * 5 | | [十五禡] | 二十二艶韻 |
| 第十七卷 | * 6 | 入声 | 一屋 | 五屑韻 |
| 第十八卷 | (第一 | 七十五、七十六之七十七、七十八 | 九 | |
| | 十三張、足) | 六藥 | 十葉韻 | |

* 1、知見本第六十張以下欠。* 2、第五十一張以下欠。
 * 3、当該巻補配。* 4、同。第十五巻は東北大学蔵本に
 拠る。* 5、当該巻欠。* 6、第八十張以下欠。

四周双辺(二〇・四×一二・四纏)(第二巻首)行字数同前。
 版心、中縫部「韻府羣玉卷幾」と題し下象鼻に刻工名。黄明然、
 * 〇江子名(明)、范純三、劉子、連実、□季、* 江清、* 范
 太、* 〇徐子中、* 虞保山、游伯成、* 魏九、張伯善、余寿山、
 * 郭名丸、* 〇張名遠(達?)、陳乙(一)、連均徳、羅如章、

*付善可、吳十六、*虞友信、*陳德全、章靖、*○范双平、虞十五、*○虞孟和、*吳子正、*○劉伯安、劉子龍、*王允元、*王五、*蔡八、○連彦博、*志賢、羅京、○魏伯美、楊建安、黄念声、蔡名(明)安、黄□実、○羅六、丘子、黄思名(民)、黄彦深(申)、余道遠、*劉景汶、*○劉宣、劉子長、劉乙、余伯善、張十、劉六、張実、江和(禾)、魏起、虞原善、余勤、羅四、○陳士通、虞京七、章□、魏啓、黄太、章四、樂□章、*姜原初を存す。また長澤規矩也氏の著録に拠れば、さらに*○熊汝敬の名を存するという。このうち*符を冠した者は明洪武八年刊『洪武正韻』の刻工と共通し、○符を冠した者は明初覆元刻本『南史』『北史』『遼史』『金史』の何れか(多くは複数)と共通する。また洪武間刻本『大明清類天文分野之書』に陳士通、陳德全、范双平、付善可、江和、江子名、姜原初、熊汝敬、余寿山、虞孟和、張名遠の十一名が見え(王重民『中国善本書提要』)、明洪武刻本『歐陽文忠公集』にも魏伯美、劉宣、連彦博、熊汝敬、徐子中、張名遠の六名が見え(島田翰『古文旧書考』)、明洪武刻本『唐文粹』に劉宣、熊汝敬、陳士通、徐子中の四名が見え(『旧書考』)、明初刻本『三蘇先生文集』に江子名、劉伯安、熊汝敬、張名遠の四名が見え(『善本

書提要』、明洪武刻本『古史』に江子名、劉宣、劉伯安の三名が見える(『文祿堂訪書記』)。これらは総じて、本版が洪武間前後に福州方面の刻工を動員して開刻された南監関係の版刻に当たることを証している。但し知見の伝本に、長澤氏が完本についてその附刻を著し『宋学士文集』卷三十八にも見える、宋濂の「韻府群玉後題」を欠いていることはなお惜しまれる。

〈布施美術館 一三三八、C〇五〇・一八〉 九冊

欠卷十五・十六 卷十三・十四補配元統二年刊通修本
当該伝本は現在(一三三八)八冊(第一、十四卷)と(C〇五〇・一八)一冊(第十七、十八卷)の二部別帙中に保管されているが、本来は一具の伝本である。

後補素表紙(二四・二×一四・七糎)左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と書す。第一、九冊のみ右傍に後筆で「元槧本」等と、また第九冊の右肩より打付に同手にて、近時の審定記録を存す。剥離した第一冊前表紙見返し前半に又別手にて「韻府羣玉〈幾〉」と書す。

第一冊に第一卷から第三卷第三十八張まで、第二冊に第三卷第四十三張から第四卷までを収める他は、毎冊二卷。序目及び第

一卷第一～二十一張、第三卷第三十九～四十二張、第四卷六十張以下、第五卷第一～十四張、第六卷第五十張以下、第十一卷第一張、第十七卷第八十張以下を欠く。

直接の対査は不能であるが、東北大学蔵本よりも少しく後印か。装訂や伝来を加味しても、本帙と東北大学蔵の第十五巻が、本来遼冊ということはなさそうである。

毎冊首に無辺紡錘形陰刻「太華山／房珍藏」朱印影（高橋太華所用）を存す。

本版の本文について附言すれば、もとの本文に比べて相当の改編が加わっているものの、本版は韻目を併合して単字の帰属音とその掲出順、反切注記を変更し、移動部分の前後の注に加減を加えた他は、無修本の記事内容をそのまま用いたものであるから、無修本内部の一版として位置付けることが可能であり、その底本は元元統二年刊本と思われる。本版に先行し得る版種としては他にも元統版補刻本、元至正二十八年刊本を存するが、これら兩種に誤刻を犯していても本版には継承する例がなく、もとの元統版と同じ文字に作っていることから、元統版を底本と認めることができる。例えば第七卷第二十二張前半第十行・

下平声八庚韻「佳城」注に「夏侯嬰死送葬、至東都門外、駟馬不行、駘地悲鳴。即掘馬蹄下、得石郭。銘云、一一鬱々、三千年見白日、于嗟、滕公居此室。乃葬焉。謂之馬冢。博物志」とある中の「銘」の字を、元統版補刻本及び至正版には「路」に誤るが、元統版及び本版には正しく「銘」に作る。他にも同様の例は多い。また元統版に於いて既に誤刻した処もあるが、本版にはこれを継承している場合がある。例えば元統版で、第七卷第一張第十行・下平声八庚韻「踐更」注に「古者、工卒无堂人迭為之、一月一更曰卒更（中略）漢昭紀注」とある中の「工」の文字は、原拠の『漢書』昭帝紀注に照らせば「正」の誤りであるが、これを本版にも「工」に誤っている。こうした点から見て、本版は基本的に言って元統版に従うものである。但し、同じ記事中の「堂」の文字は正しくは「常」である処、本版には元統版の「堂」を校改して「常」に作っている。実は、本版の特色は活発な校改にあるのだが、詳細は後の（三）章に任せ、本節には底本を指摘するに止めたい。また底本についても、う一点、元統版第十五卷第四十六張前半第七行左・去声二十號韻「賜裘帽」注に「趙宋王全斌伐蜀。京師大雪、太祖曰、我被服如此尚覺寒、況征蜀將士乎。即解裘帽一全斌。々々感泣、力征

蜀」とある処、最末の「力征蜀」の文字を、本版には「宋史」と出典注記に作り、底本に合致しない。この記事は「力征蜀」の三字を含め『宋史』王全斌伝に見え、その意味では本版の校改も故なしとしなが、本書には通常、人名に始まる故事を引き、その出典が正史本伝である場合、ただ「本」と記すか、或いは何も注記しないのが常例であるから、本版の「宋史」の補入は、底本に「力征蜀」の要句を得なかつたものと考えられる。しかし本節で底本に定めた元統版にはこの文字を存するわけであるから、ここには別段の理由が求められよう。今、確言することは難しいが、現存の元統版補刻本を見ると、この箇処にも板木の全体に互る補刻があつて、当該の三字は墨格に作つてあるから、本版の底本にもこうした補刻の存したことは十分に考えられる。先に見たように、他の箇処では現存の補刻本に拠るとは見做し難いため、これを本版の底本とは認め難いが、同様の例が第十五巻に集中して数例見えるので、当面は、補刻の第十五巻等一部分に止まる元統版（現存本の補刻は半ばを過ぎる）が印行され、本版の底本になつたものと見たい。無論、底本の補配や偶発的な事由による可能性も否定できない。

(二) 前稿未掲載の版種並に伝本

同 二〇卷

〔明前期〕刊 覆元至正二十八年刊本

元統二年刊本以来同行款の無修一〇行本系の翻版で、直接には元至正二十八年（一三六八）東山秀岩書堂刊本の覆刻である。凡例末「韻下類目」中「十七」黒牌墨罍せず。目錄末張の後半のみは十一行で、その第二―九行間に単辺有界八行で無文の木牌がある。

四周双辺（二〇・四×二二・五糎）每半張一〇行行大一四字半格、小二九字。版心、中黒口（匡郭内周に接属）（問々粗黒口）、双黒魚尾（不対向）、中縫部「勻玉幾」と題し、下魚尾下に張数。字様、底本に基づくが元刻諸版に比べるとやや筆画が鋭く直線的である。第一巻末張前半の末行下方に声目のみを標し、同後半の末行に「韻府羣玉一卷（終）」と題す。前稿中に挙げた無修一〇行本系の諸版では、前半張末行の声目上方に題記がある。又第十巻尾「韻府卷之十」と題し、其の後三行分は未刻。

第一卷尾題前（後半張）に双边有界木記「正統丁巳仲秋／安定書堂新刊」（楷體）を存す。

本版の本文には略字多く、正俗字体の採択を見て行くと、元統版後修本に拠りながら略字を多く用いて開刻した至正二十八年版のそれに、殆ど合致していることが判る。字体のみならず、例えば第七卷第三張前半第一行右・下平声八庚韻「大横」の語に対する「漢文紀、代王卜之、兆得一一。占曰、一一庚々、予爲天王。〈庚々、横兒〉」注中「兒」字を、至正版には「兒」と誤る處、当該の版にも「兒」に誤り、第十卷第三十五張前半第五行・上声十一軫韻「詩適緊」の被注語中「適」字を、至正版には「道」と誤る處、当該の版にも「道」に誤り、第十卷尾題を至正版には只「韻府卷之十」に作る處、当該の版にも同様に作る等、至正版独自の特徴を本版にも踏襲している。このことは元統版補刻本から至正版に踏襲された点についても同様で、一例を以て証すれば、第二卷第二張前半第三行右・上平声四支韻「枝」字「草木」項の「荔枝」の語に関する「張九齡賦、紫紋紺理、黛葉細枝」注中「細」字を、元統版補刻本及び至正版には「沸」に誤る處、当該の版にも「沸」に誤っている。但し、

これまた覆刻の際の常態とは言い条、至正版や元統版補刻本以来の誤りについて、本版には校正された場合のあることも窺われる。即ち、第七卷第一張前半第十行右・下平声八庚韻「踐更」の語に附された「富者雇貧者、月二千日一一（略）漢昭紀注」注中「雇」字を、至正版には「佳」に誤る處、当該の版には「雇」に正され、第二卷第一張前半第二行・上平声四支韻、韻目下細字「與脂之同用」注中「同用」字を、元統版補刻本及び至正版には「司附」に誤る處、当該の版には「同用」に正されている。こうした校正是どのような本文に拠って為されたものか問題となろうが、結論のみを言えば、恐らくは後出の新増說文本と対校の加えられた可能性がある。この点については、次の（三）章中に再説したい。また本版の本文についてもう一点、無修一〇行本の根源である元統の開版から多年を経て、本版にも特有の誤字や墨格の類を相応に増していることも言い副えて置かなければならない。

〈中国国家図書館（マイクロフィルム）三三二一〉 二〇冊

清季振宜・蔣廷錫旧蔵

後補砂子散表紙（二七・七×一五・八）左肩打付に「韻府羣玉

〈一本〉と書す。毎卷一冊。第十二卷第二十三張は補鈔に係る。また第一卷末の木記並に尾題を欠くが、料紙の欠か板木のそれか、判断できなかった。

首に単辺方形陽刻「季滄葦／臧書印」印影（季振宜所用）、無辺方形陰刻「蔣印／廷錫（蔣廷錫印）」印影を存する、清朝名家の旧蔵書である。

又 後印（明嘉靖三十一年（一五五二）荆聚序附刻）

当該の版に、嘉靖重刊の序文を附刻の伝本がある。首原序のうち重刊序（一張）首低一格で「重刊韻府羣玉引」と題し次行より本文「予以譙薄承乏内監（中略）而於諸家韻書蓋嘗究心求其全備／無出瑞陽陰氏韻府羣玉之右者予／珍愛之顧其傳世既久間有殘缺兼／字多訛謬懼誤後學亟欲重刻以闡／其懿迺過秘書河間李君正卿氏圖／焉既嘉予志校讎惟敏爰考六經載／稽羣籍求出處之真審音聲之的於／是缺者補之訛者正之而俾是書復／為完美不惟四方初學有所資益其／於廟堂之上饗序之間學士大夫製／作倡和之際未必無萬一之助也於／其告成廼書此引其端觀者其鑒／予之衷而毋以為僭乎／嘉靖壬子仲冬朔旦春山荆〈聚〉書」とあり。

毎半張九行、毎行一五字。中縫部「勻玉引」と題す。

〈北京大学図書館 NC9298・7323.47〉

二〇冊

新補藍色表紙（二八・二×一六・三糧）。破損修補。毎冊一卷。朱筆を以て句点を施さる。

右の他、劉承幹「嘉業堂善本書影」の目録に「韻府羣玉二十卷〈元刊本〉」と著し、同卷四（子部）に掲載の卷首一葉は本版と同種で、恐らくこの書について「嘉業堂蔵書志」卷三（子部類書類）に

韻府羣玉二十卷〈明翻元刻本〉

題晚學陰時夫勁弦編輯、新吳陰中夫復春編注。首有翰林滕賓序、江村姚雲序、趙孟頫題語、陰竹埜序、勁弦、復春自序。又該載事目。是書有元元統梅溪書院刊本、極精、目錄後有牌子。此本目錄後有牌子邊闌而無字、疑爲明翻元統本。と記している（繆荃孫稿）。この中に「此本目錄後有牌子邊闌而無字」と言うのは、本版の著しい特徴である。また現在『湖南省古籍善本書目』等、中国各地図書館の書目類に「明嘉靖三十一年荆聚刻本」等と著録の諸本も同版に出るものと思うが、

調査の暇を得ない。韓国・高麗大学校『石洲文庫目録』類書類にも同行款同版式の一本（零本一六冊、重刊引「嘉靖壬子仲冬朔旦春山荆聚書」、刊記「正統丁巳仲秋安定書堂新刊」）を録している。さらに柳田征司氏の『「玉塵」の原典『韻府群玉』について』（山田忠雄氏編『國語史學の爲に』昭和六十一年五月・笠間書院、『室町時代語資料としての抄物の研究』（平成十年・武蔵野書院）に追補再録）中に「正統二年版」として紹介の亀井孝氏旧蔵本も、第一巻末の木記、一部引用の本文等からは本版の如くに思われるが不明である。

本版は、第一巻末の木記に従えば明正統二年（一五五二）安定書堂刊本ということになり、版式、字様もその年次に相応しく思われるが、当該の木記の在り方自体は少しく不自然である。上述の如く本版は元至正二十八年版の覆刻と見られるのだが、至正版に限らず無修一〇行本系の款式では目録末張の後半に木記を置き、また本版で木記を置いている第一巻尾には、末張前半の末行に「韻府羣玉卷之一」の尾題があり、同行下方に「上平聲」の声目を存し、この位置には木記を設けないのが通例である。然るにこの版では、目録末張には辺欄のみの木牌を存し、第一巻尾では、前半張には尾題を欠いて下方の声目のみを存し、

他版には刻文のない後半張に木記を置いて、後半張の末行にあらためて尾題を配する結構である。尾題等の変更は、前半張に餘白のない第一巻末に木記を配するための措置として理解できる。しかしこの木記の内容は、本書に『説文』を増入した新增説文本中の一種で（上七行略）正統丁巳孟春梁氏安定堂謹白」の告文を有する明版の牌記と近似している。梁氏安定堂の告文は、無修一〇行本に同じく目録の末に置かれ、木牌中に八行（無界）で刻されているのだが、本版ではその位置に辺欄のみの八行の木牌があり、加えて木牌のある半張のみは頁全体にも十一行とされていて、これは広く新增説文本の用いた款式と同様である。こうした状況を種々勘案すると、本版の木記は明らかに梁氏安定堂刻本との接触によって附加されたものと思われる。このことは、本文上も新增説文本との接触が認められることと符契を合している。何故このような措置が加えられたものか必ずしも明らかでないが、本稿では一先ず次のような仮説によって著録した。本版は基本的に元至正二十八年刊本の覆刻である。しかし同本には誤字や墨格も多いので、新增説文本を以て対校を加えた。この新增説文本とは恐らく正統丁巳二年の梁氏安定堂刊本であったが、本版ではその牌記をも流用して無修一〇行本中

〔朝鮮前期〕刊と著録のものとは別種である。字様から見て前稿紹介の東京大学東洋文化研究所蔵〔朝鮮初期〕刊本第十九・二十巻に補配のものと同種であろうと思われる。後掲の布施美術館蔵本の第一・二巻と併せて都合四巻しか目睹していないが、その限りに於いて、字様を除き版式上は〔朝鮮初期〕刊本と変わる所が殆どない。同じく〔朝鮮初期〕刊本に基づく〔朝鮮前期〕刊本を覆刻の底本と考えないのは、専ら本文上の僅かな異同に拠っている。本版と〔朝鮮前期〕刊本の開刻の先後については、現在の所不明である。なお前稿では東大本補配分を独立に掲げていないので、本稿に補って置きたい。

四周双辺（一九・九×二二・四糎）版心、中黒口（匡郭内周に接属）。三（第一巻首二張のみ四）黒魚尾（最下のは首のみ上下欠く張も多い）（線黒魚尾）第二（首二張のみ第三）魚尾下張付。これも寸法を除いて底本と同様である。

〈布施美術館 一一二一〉

一冊

存卷一・二

後補洪引漉目艶出朝鮮表紙（二四・六×一六・〇糎）左肩打付に「韻府 〔共十 日〕」と書し、右肩より打付に同筆で声、韻目を書す。天地截断。前表紙内側に朝鮮人の手跡あり。見返

し大亜字牌中「應夢山（隸体）」と刻す。この部分、牌外にも板木の地が見えるので印章の如きものではないが、見返し部の紙質は本文よりやや粗で後に補ったものと見え、封面の如き元来一具のものではないと思われる。今、さらに朱筆を以て「消却」と重書されている。

朝鮮人の手と思われる墨筆を以て、欄上に標字注書入あり。首に単辺方形陽刻「要／門」朱印影を存す。

〈東京大学東洋文化研究所 別置・甲三五のうち〉

卷一・二、五、十八補配〔朝鮮初期〕刊本

卷三・四補配〔朝鮮前期〕刊本

第十九・二十巻を存す（一〇冊のうち一冊）。本文楮紙。

欄上に韻目を墨書、これは邦人の手と思われる。

冊首に鼎形陽刻「觀／靜庵／夫」朱印影を存す。詳細前掲掲載。

(三) 諸版本の關係について (再説)

上述の〔明洪武八年序〕刊本及び(二)拾遺三版を加えて、無修一〇行本系諸版の大まかな依拠關係を图示すれば、左の如くであろう。無論、個別には底本に従わず他本を以て校改した点もあるので、実情はさらに複雑なものである。

元元統二年刊本

↓〔日本南北朝〕刊本

↓〔明洪武八年序〕刊本

↓〔朝鮮初期〕刊本 ↓〔朝鮮〕刊本

↓〔朝鮮前期〕刊本

又 後修本

↓元至正二十八年刊本

↓〔明前期〕刊本 ↓〔明中期〕刊本

先ず〔明洪武八年序〕刊本について述べたい。本稿(一)の末に論じたように、本版の底本は元元統二年刊刻の未修本であ

る。しかし乍ら本版の特点是、寧ろ本文の盛んな校改にある。従つて、その校改の来源についても少しく附言して置く必要がある。以下に他版との比較を加えて行くが、前記の如く本版は、分韻の変更に伴つて他の無修本とは款式を同じくしない。本来なら、両者の行格を示しながら論じて行くべきものと思われるが、本版に於ける記事の移動はほぼ検出可能な範囲内とも思われるので、煩を避けて無修本の張数のみを以て示すことにする。

さて本版校改の端的に窺われる箇処は、底本に墨格または誤刻の文字である。そうした場合に関して本版の処遇を点検してみると、多くの場合、何らかの措置の施されていたことを知る。例えば第二卷第十一張(以下「二―十一」の如く表記)・上平声四支韻「赤螭」注「■」。子虚」の如き、元統版に墨格の箇処を、本版には「蛟龍」に作る。この「蛟龍赤螭」とは、標示の「子虚賦」ではなく、同じ司馬相如の「上林賦」中の句である。また四―五十五・上平声十四寒韻「盡道休官」注に元統版「僧靈徹答常丹、相逢――去、林下何曾見一人。雲溪友父」とある処、この中の「常」を本版には「韋」に作り、「韋丹」とは人名であつて現行の『雲溪友議』卷四に照らして

も「韋」が正文である。これらの本文は、当該〔明洪武八年序〕刊本の参照し得た他版を検しても同文を得ず、本版独自の改字に係るものと見做される。また底本に支障の箇処を離れても、八一三十五・下平声十二侵韻「還俠客金」注に「李勉少貧。遊俠諸生將死出白金曰、幸君以此爲葬、余則君自取之。既葬、勉置余金棺下。後其家竭、勉其起墓出金付之。本」とある中の「其家竭、勉其起墓」の文字は、一応は意を通ずるものやや不審であるが、本版には「其家謁勉、共啓墓」に作っている。

これらは『新唐書』李勉伝に照らしても正文である。一方、二一八・上平声四支韻「遇以常兒」注に「謝惠連初不爲父方明所知。族兄靈運曰、阿連才悟如此、而尊作常兒一之」とある「作」の字を、本版には「叔」に作る。これは『南史』謝靈運伝に「惠連幼有奇才、不爲父方明所知（中略）靈運又以爲絶倫、謂方明曰、阿連才悟如此、而尊作常兒遇之」とあって（『宋書』謝靈運伝も同様）本来「作」の字を正とする。本版には、謝靈運と謝方明の係属である意を以て「尊叔」と改めたものであろうか。かかる改字はみな先行の他版に見えず、本版の刊刻に際しては入念かつ積極的な校改の行われたことが判る。その他、底本の略体字や通用字を改めた場合が目に着く。例えば「録」「歐」

「義」「盧」「獨」「邊」「錢」「貌」「猶（尤）」「徵（証）」「辨（卞）」「財（才）」「登（等）」「薑（姜）」等、正体に改めているのも、坊刻本の多い本書諸版の中では、本版に特異の変更である。前稿に記した本版の来歴を考えると、明朝に於いて、恐らくは洪武韻の普及を図るために改編、開刻されたのが本版であったから（前稿三六八頁・宋濂「韻府群玉後題」等、また本稿（二）章参照）、その校字作業は、国子監の權威を委ねられた学士、生員の手により、それらはある程度の規範意識に基づく入念なものであったに相違なく、本本文の示す位相は、そうした刊刻の経緯にも照応する特異なものと言つてよいだろう。

ただ上記以外に、他版に拠る校改も認められるので記して置きたい。元統版の二一三十九・上平声六魚韻「紅裳人魚」注「又謝仲見婦人出没波中、腰曰下皆魚也。稽神録」中の墨格を、本版には「玉」に作り、と同じく七一三・下平声八庚韻「三彭」注中「殺三虫即一」。柳。一者彭質、彭、彭居」中の墨格を「矯」に、十五一五十三・去声二十一箇韻「牛酒漉」注中「肯教一、詩腸言。杜甫」中の墨格を「此詩」に作っている。こうした校改の当否は別としても、元統版補刻本、至正二十八年刊本は何れも元統版の墨格を踏襲するのに対

し、本版には何等かの文字が宛てられている。これらの文字は、本版に先行する無修一〇行本には見えないのであるが、実は半面一一行の新增説文本（元至正十六年刊）本は本版に先行）に即て当該の箇処を検して行くと、本版同様の文字が宛らわれているのを見出すことができる。また例えば元統版補刻本十五—三十・去声十七霰韻「見蔑面」注に「子産始知然明日、它日吾—之—而已、今吾見其心也。襄廿■」とあり、これは本来『左伝』襄公二十五年十二月の記事で、墨格は「五」と改正すべき所、本版には「年」と誤っている点さえも、新增説文本の当該箇処に合致している。但しこのような新增説文本との合致は、ほぼ底本墨格の場合にのみ認められるようである。本版は無修一〇本にしてしかも大幅な改編を伴い、他方の新增説文本は増修一行であるから、両者の行款には懸隔が大きい。しかし本節に示した校改の来源はこの新增説文本以外には認め難いのであって、文字標記を介して両者の校讎に及んだものであろう。切り接ぎして洪武韻に改編する前の段階で校合したと考えれば、それ程の難事業ではない。無修本系統の翻版に於いても、文字校改のレヴェルでは新增説文本の影響を見逃すことができないのである。

新增説文本との校合ということでは、本稿（二）章に紹介した〔明前期〕刊本にも、その可能性の認められる所である。若干の例を挙げれば、本版の底本である元至正二十八刊本の、二—三十九・上平声六魚韻「紅裳人魚」注「又謝仲■見婦人出没波中、腰已下皆魚也。稽神録」の語中の墨格は、至正版の底本である元統版後修本以来のものであり、本版にはこれを「玉」に校改しているが、その来源は新增説文本か、同系本の影響を被った〔明洪武八年序〕刊本のいずれかと思われる。又七—三・下平声八庚韻「三彭」注「殺三虫即—。柳。—者彭質、彭■、彭居」中の墨格も、その由来は同様であるが、本版には「矯」に校改し、やはり新增説文本か〔明洪武八年序〕刊本に拠ったと思われる。こうした校改は数多く、これらの例のみからは、本版の拠った校合本文が〔明洪武八年序〕刊本であった可能性も残るが、例えば二—十一・上平声四支韻「赤鱗」注「■—」。子虚」中の墨格を〔明洪武八年序〕刊本は「蛟龍」と改めているのに、本版には新增説文本と同様に「〇〇」の符号を以て対処していること、又本版に於ける牌記の在り方（前章参照）等を勘案すると、先ずこれらは、直接もとの新增説文本に拠ったものと見てよい。なお元統版及び底本の八—十八・下平声十二

侵韻「鉤轄」注「雲木叫」。林通「中」通「の」誤字を、本版には「通」に改正してあるが、これは新增説文本には「通」のまま、「明洪武八年序」刊本では「通」と校改してあり、洪武本に拠るかとも見えるが、全体の傾向と見るには及ばず、この程度は本版独自にも改正し得たものと思われる。但し、本版本文については精査に及んでいないために、新增説文本系統中の如何なる本文を用いたかは確定できず、牌記の内容からは、〈元至正十六年劉氏日新堂刊〉本ではなく、後続の翻版である明正統二年梁氏安定堂刊本との関わりが想定されるものの、本文上はこれを証することができない。この点については続稿を期したい。

上述のように「明洪武八年序」刊本、「明前期」刊本の本文とその性格が明らかになり、そこに新增説文本からの影響が認められることになると、前稿に記した諸版の性質についても、更に補い直す必要を生ずる。前稿第三章に「版本考」と題して検証を加えたのは、大略は覆刻の關係によつて整理できる無修本『韻府群玉』諸版が、しかしその詳細な実情に於いては単純な覆刻と見做し得ず、覆刻時の訛謬を除いても、他版の干渉ま

たは諸版各様の校正の影響を蒙っている場合が多いという点であった。例えば元元統二年刊本の最も忠実な翻版である「日本南北朝」刊本に於いてさえ、元至正二十八年刊本との校合による改刻の事実が認められ、このことは本文自体からそう考えられるのみでなく、本格的な印行以前の校改の情況を窺わしめる零葉の伝存によつても証し得る事柄であった。この点は、我が国中世期に於ける版刻の実情を知る上では格別の意味があり、本邦での開版も多様な唐本の流入を背景に行われ、一版本の覆刻と言つても偶発的に為されるわけではなく、版種の採否、又実際に使用する底本の取捨について充分な吟味を経ていたことを徴証するものと考えられる。こうした版刻の情況は、底本採択の後にも校合改刻という形で影響を及ぼし、新版の本文中にその片鱗を示していたのである。右のような事情は『韻府群玉』を離れても、本邦中世期以来伝存の漢籍諸本に執拗な校合の痕跡が示されていることとも通底し、既に柳田征司氏によつて指摘された⁸⁾、漢籍抄物に於ける底本採択の在り方、又当時の学問注釈中に見られるような、本邦開刻本に対するやや慎重な態度とも揆を一にする事柄であろう。この点に関する考証は、前稿校了後に知見し得た数点の伝本を考慮に入れても修正を要しな

いものように思われる。又前稿では〔日本南北朝〕刊本の場合と対比して、朝鮮刊刻の両版に於ける文字の改正、特に〔朝鮮前期〕刊本の印面から窺われる文字の剽改と、その改刻の前提となるべき校合の在り方を検討して、他版のみならず出典に遡つての本文の整備が取行われている点を以て当該版本を特徴付け、「朝鮮では補刻を交えた元統本を底本として覆刻が行われ、その過程で底本の墨格を除く作業が施されたが、結果として一部に〔明洪武八年序〕刊本系統の本文を容れることとなつた。また後にこの〔朝鮮初期〕刊本を底本として再度覆刻が企てられ、墨格の除去が徹底された他、彫版の途上、正字正文を得ようとする規範意識に基づいて更に校正が加えられ、出典に立ち戻つて文字を改める作業を経て、〔朝鮮前期〕刊本の印行を見た」と結論した〔前稿四〇五頁〕。朝鮮版両種に於ける盛んな本文校改の様子は、本稿に前掲した数種の追加伝本にも窺われる所で、早印本によつてもそうした情況を確かめられることから、これらの現象は本格的印行後の修刻によるのではなく、開版時の校正作業に由来するものとした前稿の仮説は、より一層確実なものとなつた。また追加伝本の料紙の情況から、両版ともに十六世紀以前に於ける李朝内府の印行に係るものと思わ

しき点が、新たに明らかとなつた。しかしその後の調査により、両版の校正の実情について、〔朝鮮初期〕刊本を「一部に〔明洪武八年序〕刊本系統の本文を容れ」たものとし、〔朝鮮前期〕刊本を「正字正文を得ようとする規範意識に基づいて更に校正が加えられ、出典に立ち戻つて文字を改める作業を経」たものと断じた点については、修正せざるを得ないこととなつた。その所以は、前稿に於いて両版の本文と元統版のそれとを比較考証した異同箇処について、両版に特異と見られた点は、実は悉く新增説文本または〔明洪武八年序〕刊本の形に合致することが判明したからである。以下その点について例証し、新たに所見を述べて置くこととしたい。なお新增説文本については版種、伝本の解題を加えていないが、当面は便宜上、第一次の版刻と思しき〈元至正十六年（一三五六）劉氏日新堂刊〉本によつて論ずるものとする。

先ず〔朝鮮初期〕刊本について見て行こう。当該版の底本は諸般の事情から、主には元統二年刊本であると見て誤りない。しかし〔朝鮮初期〕刊本に特異な点として、元統版には墨格で正字を得ない箇処の多くに、然るべき文字を以て本文の補われていることが挙げられる〔前稿三七二頁・表一〕。例えば二―

三十九・上平声六魚韻「紅裳人魚」注中「又謝仲見婦人出沒波中、腰已下皆魚也。稽神錄」の「■」を、当該の版には「玉」に作る。又七―三・下平声八庚韻「三彭」注中「殺三虫即一（柳）。一者彭質、彭■、彭居」の「■」を、当該の版には「矯」に作る。又十五―五十三張後半第八行左・去声二十一箇韻「牛酒澆」注中「肯教一、詩腸■言。杜甫」を、当該の版には「此詩」に作る。これらの墨格校改については、第十五卷中の数例について〔明洪武八年序〕刊本残巻の文字と合致したことから、前稿中に「底本に不明の箇処を、洪武本（もしくはその依拠本、以下同）によって補ったようにも見える」と推断した（前稿三七四頁）。またその後、第十五巻以外の例についても〔明洪武八年序〕刊本と合致することが判明した。しかし洪武本に拠ったとした点は早計で、実は洪武本の当該箇処は、悉く新增説文本によって校改されたものであること、前節に見た通りである。この点に関しては前稿に考慮を欠いて居り、現状からすれば〔明洪武八年序〕刊本も〔朝鮮初期〕刊本も共に、新增説文本に拠って校改したと見て差し支えないことになる。ここで想起されるのは、〔朝鮮初期〕刊刻と思わしき在韓伝本に附載し『東文選』卷百三にも収める南秀文「韻府

群玉跋」の記述で、これに「爰命集賢殿出經筵所藏善本二部、參校送之」とある中の「善本二部」とは、その一方は底本の元統版であるとして、もう一方は〔明洪武八年序〕刊本であったか新增説文本であったか、俄には判定し難いということになる。また寧ろ、消極的な理由ではあるが、二―十一・上平声四支韻「赤螭」注「■一。子虚」の箇処を、〔明洪武八年序〕刊本には「蛟龍」に校改していたのに、本版では墨格のままとして改正されていない点などを見ると、この箇処を「○○」として校改していない新增説文本の方によったとも見られる。また上記南氏跋文の首に「元朝瑞陽陰氏」と書き起こしていることも一の証左で、本書の編者陰氏兄弟の本貫地を「瑞陽」とすることは、〔明洪武八年序〕刊本を含め〔朝鮮初期〕刊本に先立つ無修一〇行諸本には全く見られないことであり、新增説文本目録末の告文にのみ「瑞陽陰君所編韻府羣玉」と書き起こされていることは、〔朝鮮初期〕刊本が〔明洪武八年序〕刊本ではなく新增説文本によって校改されたものである可能性を示唆しているよう。

次で〔朝鮮前期〕刊本について記す。本版の底本は〔朝鮮初期〕刊本であつて、前節に見た〔朝鮮初期〕刊本の元統版墨格部

校改の文字は、全て本版にも継承されている。本版に特異な点としては、先ず〔朝鮮初期〕刊本に僅かに校改されなかった元統版墨格部について、新たに校改の加えられた点を挙げる事が出来る。前出二一十一・上平声四支韻「赤螭」注中「■」子虚」の墨格を、当該の版には「蛟龍」に作る。この箇処は元統二年刊本以下、〔朝鮮初期〕刊本を含む無修一〇行本と、一一行の新增説文本には墨格を改正せず、唯一〔明洪武八年序〕刊本では「蛟龍」に作っている。これは〔朝鮮初期〕刊本に漏れた墨格の校改を〔朝鮮前期〕刊本では〔明洪武八年序〕刊本によって行ったものと見られよう。また元統版の誤刻部分を校改した場合を挙げる。これも前出九一三十一・上声四紙韻「羌博士」注中「北齊李業興師深遵明、鮮于靈復曰、久逐^一何所得乎。北史」に「深遵明」「鮮于靈復」とある文字を、当該の版には「徐遵明」「鮮于靈馥」に作る。元統二年刊本以下、〔朝鮮初期〕刊本を含め「深」「復」の誤りを踏襲し、新增説文本にも同様であるのに対して、「明洪武八年序」刊本には正しく「徐」「馥」に作っている。これら元統版誤刻部分の校改は〔朝鮮初期〕刊本には見られず、〔朝鮮前期〕刊本が〔明洪武八年序〕刊本に拠って校改したもののように思われる。あるいは

〔朝鮮前期〕刊本は原拠に従って校改したものとも思われようが、例えばこれも前出の、七一・下平声八庚韻「踐更」注「古者、工卒无堂人送為之、一月一更曰卒更（中略）漢昭紀注に「工卒无堂人」とあるのは、〔明洪武八年序〕刊本にはこの中の「工（正の誤り）」字は改めず「堂（常の誤り）」字のみを改めて「工卒无常人」に作り、〔朝鮮前期〕刊本もこれに同じく「工卒无常人」に作っていることからすると、やはり〔朝鮮前期〕刊本は〔明洪武八年序〕刊本に従って校改したものの如くである。又五十六・下平声五歌韻「孰何」注「衛綰等不^一綰^一」とある末尾の空格に、本版には「傳」と補われているが、これは「漢書」衛綰伝に「及景帝立、歳餘、不孰何綰」とある（『史記』同「不誰呵綰」）のに拠り、本書の節略によって意の通じ難い所、最末の「綰」字を出典注記に取って「不孰何。綰傳」と見たものであろうが、これ又〔明洪武八年序〕刊本の「不^一（綰傳）」とした意改に基づくものであろう。また挙例は省略したいが、前稿に〔朝鮮前期〕刊本剋改部分の検討から導かれる特色として示した諸点、即ちイ、底本の略体字もしくはは音通による代用字を、正体の文字に改めていること、ロ、標字代用の「^一」符や空格を、本書の体例に従って適当な文字に

改めていること、ハ、諸版に存する不正の文字を正字に改めていること〔前稿三九六頁・表十a以下〕は、改刻の傾向としては前稿の判断で問題ないのであるが、これらは基本的に〔明洪武八年序〕刊本との校合に拠って改刻されたものであって、前稿に〔朝鮮前期〕刊本独自の措置と考えた点は修正を要する。

ただその大半は洪武本の影響を容れたと見られるものの、若干ではあるが、本版に独自の校改と見られる点もある。例えば十五―二十四・去声十七霰韻「赤縣」注中「中国名―神州。史、孟子列傳」とある処、本版に「孟子」の文字を「鄒衍」と剋改していることは〔明洪武八年序〕刊本や諸版にも見えない。また十五―三十一・去声十七霰韻「舉扇」注中「肖子顯爲吏書、見九流不與交言、但―一揮而已。衣冠切恨之。舉書」とある処（この中の「吏書」は「尚書」の、「舉書」は「梁書」の誤刻であろう）、本版には「肖」字を「蕭」の正体に改めているが、これも諸版に例がない。これらは恐らく本版校正者の独自の判断に拠るものであろうが、校改の態度そのものは〔明洪武八年序〕刊本のそれを敷衍し補う体のものである。ただ一方で極少数、元統版及び底本〔朝鮮初期〕刊本の誤字や略字について、〔明洪武八年序〕刊本では既に改正されているのに、当該

〔朝鮮前期〕刊本では底本を踏襲し改正されていない場合も存する。これらは校讎の不徹底による瑕瑾と見られようか。

新たに判明した、新增説文本と〔明洪武八年序〕刊本、〔明前期〕刊本、また〔朝鮮初期〕刊本、〔朝鮮前期〕刊本五者の関係を総合して略述すれば、以下の如くであろう。〔明洪武八年序〕刊本は、元統二年刊（一部補刻か）本を底本とし、一部の底本不明の箇処は〔元至正十六年刊〕新增説文本の文字を容れ、一方で底本を越えて正文に復するよう積極的に文字の改正を施しながら、全体に洪武韻への改編を加えて刊刻したものである。また〔朝鮮初期〕刊本は、同じく元統二年刊（一部補刻か）本を底本とし、ほぼ底本の文字を踏襲しながら、底本墨格の箇処については大略を新增説文本（或いはその影響を容れた〔明洪武八年序〕刊本）によって校改、刊刻した。続く〔朝鮮前期〕刊本は、この〔朝鮮初期〕刊本を底本とし、〔明洪武八年序〕刊本によって校改を加え、しかも底本では比較的に着きやすい墨格等の部分に止まっていたものを、本版には広く全面に校改を行き渉らせ、また〔明洪武八年序〕刊本の態度を敷衍して独自に本文を改正した上で、刊刻されたものである。又〔明前期〕刊本も新增説文本系統の影響を容れているが、こ

れは〔明洪武八年序〕刊本等の別版を介するものではなかったと思われる。この中、朝鮮版兩種本文の位置付けと評価については、新增説文本と〔明洪武八年序〕刊本の関与という視点を加えて、前稿を補い且つ正したい。ただ諸版本の特色は、底本の採択、校合本文の有無あるいはその種別、校改の態度といった三方面から評価すべきと考えられ、またそうした版刻の連続して行く処に、本書諸版本の実情があったと見られることは、大略前稿の趣旨に同様である。以上を踏まえ、再び諸版間の關係を图示すれば下記の通りであろう。図中、版種名左傍（→）内には、判明した校合本文を示した。前稿三七〇頁の同様の図と比較して、本稿に補正の事項を看取されたい。

元統二年刊本

↓〔日本南北朝〕刊本

（→元至正二十八年刊本）

〈又 一修を存するか〉

↓〔明洪武八年序〕刊本

（→新增説文本）

↓〔朝鮮初期〕刊本 ↓〔朝鮮〕刊本

（→新增説文本〈或は〔明洪武八年序〕刊本〉）

↓〔朝鮮前期〕刊本

（→〔明洪武八年序〕刊本）

又 後修本〈或は通修本〉

↓元至正二十八年刊本

↓〔明前期〕刊本 ↓〔明中期〕刊本

（→新增説文本）

(四) 新增説文本の成立について

諸版本間の干渉という意味からすると、上説(二)に解題した〔明前期〕刊本、又〔明洪武八年序〕刊本と、恐らくは〔朝鮮初期〕刊本、更にこの両者を通じて〔朝鮮前期〕刊本に、款式の異なる新增説文本の影響が認められる点は重要である。ただ行論の都合上、本稿に至るまで新增説文本の本文や版式の特徴について詳しく論じていない。これは当初、無修一〇行本とは款式が異なり、その本文にも増修のある新增説文本については、無修本と節を分かつて論ずべきと思われたからである。しかし調査を進めるうち、前章に補訂した如く、先ず諸版本に於ける校合の実態を通して、無修本系統の諸版にも新增説文本からの影響のあったことが知られ、その記述には新增説文本の本文とその来源に関する解説を前提すべきであった点に気付かされた。更には又、新增説文本の嚆矢と見られる〔元至正十六年刊〕本の開刻と、無修一〇行本の元元統二年版とに、本質的な関係のある事実も判明した。このことからすると、無修本と新增説文本は、当初予見したように截然と一線を画するものでは

なく、両者は版刻の上から見ても、連続性の高いものと考えられる。そこで、相前後して恐縮であるけれども、新增説文本系統諸本の具体的な伝本解題は次稿以下に譲り、本稿では新增説文本の始発について記し、一応の結びとしたい。

イ、『説文解字』の増入

新增説文本の系統の中では、元至正十六年(一三五六)に劉氏日新堂から刊刻された版本が先行のものである。その開版の経緯については、現存元刻本目録末の木記告文に示されているから、先ずこれを引用したい。

瑞陽陰君所編韻府羣玉、以事繫韻、以韻摘事、乃韻書而兼類書也。檢閱便益、觀者無不稱善。本堂今將元本重加校正、每字音切之下續增許氏説文以明之、間有事未備者以補之。

韻書之編誠為盡美矣。敬刻梓行、嘉與四方學者共之。至正

丙申莫春劉氏日新堂謹白。

これに拠れば、劉氏日新堂は本書を刊刻するに当たり、原本に校正を加え、字毎に反切に続けて許慎の『説文解字』(以下「説文」と略称)を増入し、また記事の不足があれば独自にこ

れを補った（以上、傍線部）というのであり、その本文を見ると、告文にある通り『説文』等の増入を伴っている。新增説文本とは、このように単字注の首（同音字の始めであれば反切の後）に『説文』の記事等を増入した一類の本文をいうのである。本文の款式について見れば、同系本の毎行の字数は無修本と同じく小二九字を数えるが、半張毎の行数を見ると、皆『説文』増入分に対応して一行を増し、半面に一一行を具えている。しかし増入された注の字数は正しく一行分（双行小字で五八字分）に相当するとは限らないから、結果として巻毎の張数はもとの無修一〇行本とは微増もしくは微減を示し、巻の途中では、増入前の行款と若干の懸隔を生じている。

ただ、前引の告文には全ての文字について『説文』を増入したように記してあるが、実際にはその全てに附されているわけではなく、文字により『説文』を加えたり加えなかったりしているのは、如何なる基準でその採否を定めているのか、甚だ明瞭を欠いている。實際上、本書に於けるこうした『説文』増入の規矩については、その他にも種々の問題を含んでいる。例えば、引用される『説文』の記事の分量も多寡一様でなく、極めて簡潔な字義注の数字を引くのみかと思えば、文字によっては、

被注字の篆体の標示から附帯の「徐注」に至るまでの詳細な引用を伴う場合があつて、その採択に何等かの準則が認められるかと言つと、これも一見すると不明の如くである。しかしこれらの問題の多くは『説文』の本文やその他の文字学的な趣旨に基づくものでなく、版刻の実情に淵源する現象と見なくてはならないようである。というのも、これらの増入は、直接『説文』に取材したものではなく、殆ど全て〔元〕刊修刻本系『古今韻会举要』（以下「韻会」と略称）中の『説文』引用部分に依つて補われており、しかもある種の分業の形で一斉に増補されたものと判ぜられるからである。

右の点、本稿には先ず一例を以て証したい（図版一参照）。本書第一巻・上平声一東韻中に「潼」字の項を存し、無修一〇行本にはただ「水名」と注するのみである。しかし新增説文本に即てこれを見れば、その注は次のように増益されている。

説文、水出廣漢梓一北界。（改行稿者、以下同）

水經注、今華州華陰縣、南入塾江。又州名。潼川府、本唐梓一郡。又閔名。

通典、本名衝閔。言、州衝激華山之東、後因一水遂名閔。本書には『説文』に続いて『水經注』及び『通典』を引くが、

この中の『通典』引用部は、その卷一七三・州郡部三「華蔭」注に「本名衝關。河自龍門南流、衝激華山之東、故以為名」とあるのを節略したものとと思われる。本書「州衝激」の「州」は、「河」の誤刻であろう。また「自龍門南流」の語は本書には見えない。ところが〔元〕刊〔後修〕本の『古今韻会举要』卷一の一東韻の記事を見ると「潼」字について

説文、水出廣漢梓潼北界。从水童聲。

水經注、今華州華陰縣、南入墊江。又州名。潼川府、本唐

梓潼郡。又關名。

通典云、本名衝關。言、河衝激華山之東、後因潼水名關。

と注して『説文』『水經注』『通典』を引き、『通典』の記事も節略されていて大略本書に同じである。更に又、この箇処の『通典』引用部を『韻会』（明前期）刊本及び日本応永五年刊本（いわゆる五山版）に即て見ると

通典云、本名衝關。言、河自龍門南向而流、衝激華山之東、

後因關西一里有潼水、遂以名關。

の注を存し、〔元〕刊〔後修〕本に見えない傍線部の記事を含んでいる。これは、〔元〕刊本後修時に「潼」字注の後に「潼」字を増益し、版面に刀を入れて「潼」へ木名花可為／布又冬韻□_{アキ}」

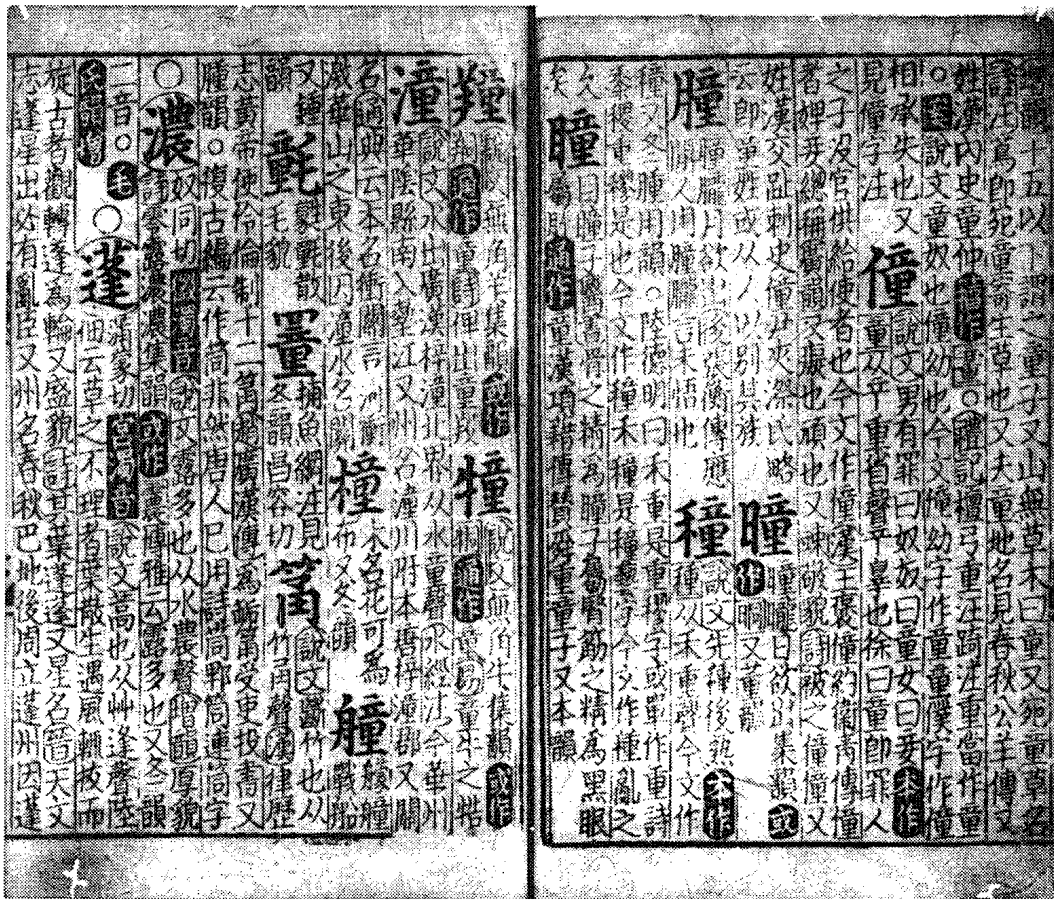
の文字を加え、その小字七格分を捻出する必要から「潼」字注の末脚を節略したこと（但し〔元〕刊未修本は未見）に起因する相違で、〔明前期〕刊本は〔元〕刊未修の版本に基づく覆刻に係り、日本応永五年刊本は、一旦は〔元〕刊〔通修〕本に基づいて刊刻した上、同未修本に基づいて校讎改刻に及んだ結果である¹⁰。こうした『韻会』改刻の経緯に鑑みると、新增説文本の『韻府』注が『韻会』の、剗改節略後の本文に合致することは、『説文』を続増したという新增説文本の『韻府群玉』が、実は〔元〕刊〔後修〕本系の『古今韻会举要』の引用に依って増入したことを証していよう。この前後を見ても、新增説文本に「瞳」「伺」「瞳」「瞳」「綱」「置」「瞳」「瞳」「潼」「衝」「瞳」「瞳」と続くうちの「瞳」「潼」「瞳」「瞳」のみに『説文』を増入して「瞳」「伺」「瞳」「瞳」「綱」「置」「瞳」「衝」に欠いていることは、当該字の『説文』の録否ではなく、『韻会』への引用の有無に従うもので（もとの『説文』に見えないのは「瞳」「瞳」「綱」「瞳」のみ）、部首配列の『説文』に注を求めるより、本書と同様に韻書の結構を具えた『韻会』を参照するという、現実的方法による増益であった。



新增說文本文（〈至正16年刊〉本）
〈京都大学附属図書館蔵〉



無修本（元統2年刊本）
〈東北大学附属図書館蔵〉

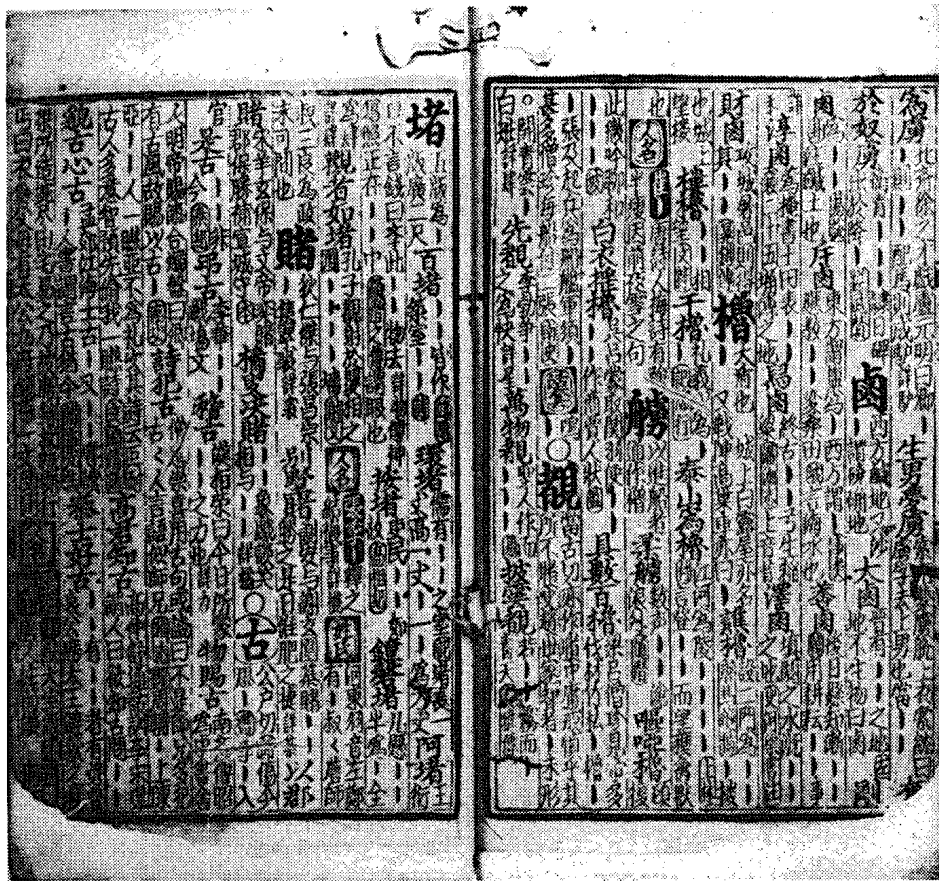


『古今韻會舉要』〔元〕刊〔後修〕本
当該部分 〈内閣文庫蔵〉

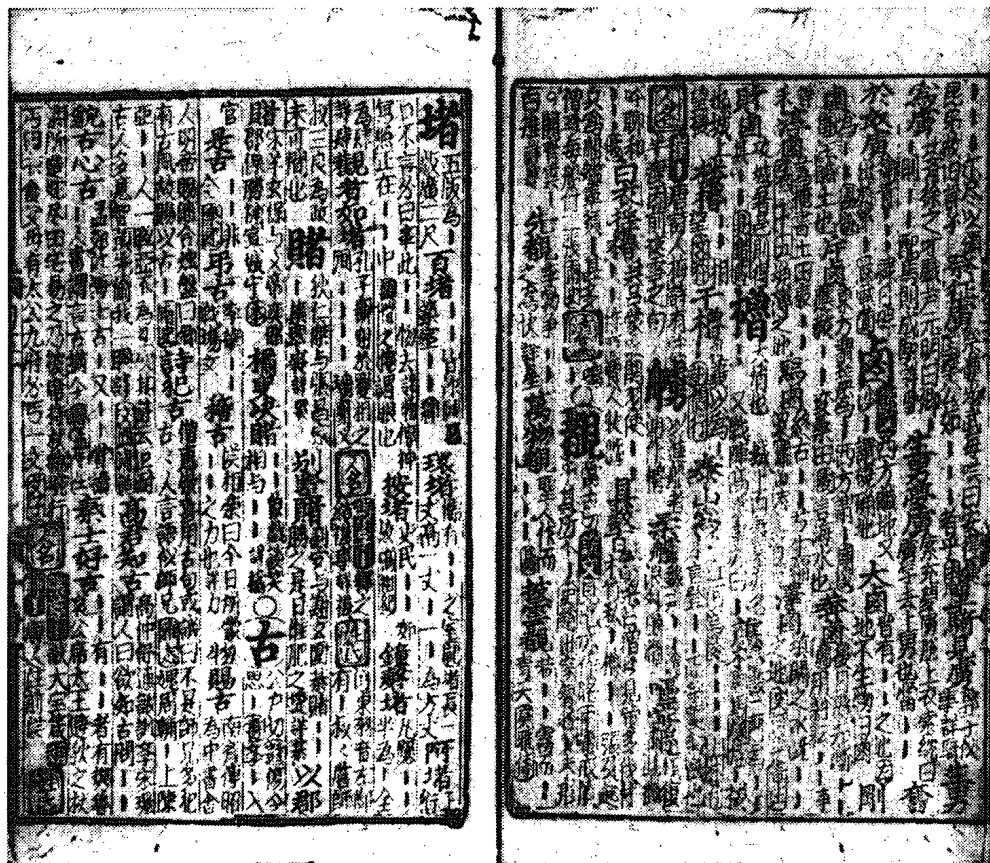
従って本書に『説文』を加えるかどうかの採否は、専ら『韻会』当該字注に『説文』が引かれるかどうかに懸かっているし、『説文』引用の多寡は『韻会』の引用量や分業のための記事の調節と関係して、担当部分の記事に不足があれば『韻会』から引く『説文』や『広韻』『増修互注礼部韻略』⁽¹⁾、時に『水経注』『通典』等の如き『韻会』所引の書を加えて注釈の記事を増やし、分担された他の部分と間隙を生じないように巧まれているのである。このために、無修本の行款と新增説文本のそれとを比べると、巻中であっても行頭で一致している場合が屢々見受けられる。こうした版刻の実情からすると、新增説文本に於ける増修とは、極めて効率的に、短時日のうちに為され、無修一〇行本『韻府群玉』に『古今韻会举要』の字注を恣意的に増補した、速成の改編と推断せざるを得ない。また上記のような版本の性質と連動して更に指摘されることは、本書第十巻の途中から第十五巻の途中に至る部分には、抑もこの『説文』の増入を全く欠いている点である。

口、無修一〇行本との接属

本書無修本の第十巻は上声の七麌韻から十四旱韻までの文字を収めるが、これは新增説文本にも同様である。⁽¹²⁾ また新增説文本では、当該の巻についても『説文』中の記事を増入している。但し巻首「麌」にはこれを加えず次の「僕」から増入して、以下も全ての文字に互っているわけではないが、その採否が『韻会』に依っていることは他の巻に同様である。ところが当該の第十巻では、七麌韻中の「覩」を最後に、次の「堵」以下には『説文』の増入が全く見られなくなる。「堵」の後も「古」字等、もとの『韻会』には『説文』の引用があるので、増入の来源に照らしてもこのことは不審である(図版二参照)。そしてこの後は当該巻の末尾まで同然で、更には続く第十一巻から第十四巻の間にもやはり増入が見られず、第十五巻・去声十七霰韻中の「殿」に至るまで、この本文には『説文』が引かれていない。「殿」には『韻会』にも『説文』を引かないが、その前「電」は、『韻会』には『説文』を引く文字である。しかし「殿」に続く「旬」から再び『説文』が増入されるようになり、これ以降は又『韻会』引用の有無に依って拮据されているのが実情である。



元統2年梅溪書院刊本・第10卷第14-15張
 〈東北大学附属図書館蔵〉



〈至正16年日新堂刊〉本・同（左10行／右11行）
 〈京都大学附属図書館蔵〉

右のような、新增説文本に於ける『説文』増入の本文上の問題は、至正十六年の刊記を有する元刻本の、款式上の変化とも重大な関わりがある。同版諸本の行款は毎半張十一行、毎行小二九字であるが、これは前節イに述べた通り、無修本の字数はそのままに、本文の増加に対応して半張に一行を増益した結果である。本来、単純に増修を加えていくためならば、何も行数を増してもとの張数に近付けなくともよいわけであるが、本版刊刻の実情に鑑みる時、無修本との対応関係を目途に分業を行う場合にはその必要があったものと見られ、本版の措置にも一定の合理性が認められよう。しかし本版には、第十卷第十五張から第十五卷第二十四張に至るまでの間に一行の増加が認められず、この部分は半張毎に一〇行のまま、その箇処は、本文の上で『説文』の増入が認められなくなる箇処と合致している。¹³⁾ 具体的には、第十卷、七麁韻「靚」の後に第十五張に移って次の「堵」を掲出し、ここから半張に一〇行となって『説文』が引かれなくなり、第十五卷、去声十七霰韻「電」「殿」の後に第二十四張を終わって次の「甸」を掲出、この第二十五張以降は半張一行に復し、『説文』の増入も再開されているのである。又本版では毎巻の首尾に「新增説文韻府羣玉卷之幾」と題

するが、第十卷尾題から第十五巻の首題までには、ただ「韻府羣玉卷之幾」と標示していることも、そうした内実に符契を合しているよう。

ところでこの款式等の変化に注意を加え、目録上に、第十巻から第十五巻までは他版の補配と標記する場合も見受けられるが、これは特定の伝本に偶々起こっている変化ではなく、諸本を通じて認められる現象であり、それと揆を一にして、板木レヴェルの変化としてもその痕跡を現している。抑も新增説文本中に『説文』を増入しない第十巻第十五張から第十五巻第二十四張間の行款は、実は純粹な無修本のそれと完全に一致しており、張付さえも同一である。考えてみればこのことは甚しく不審で、第十巻の始めから本文を増益してきたのであるから、いくら一行を増して対応したと言っても、第十五張の首で過不足なくもとの行款に復することは、餘りにも出来過ぎていよう。そう考えて仔細に検証すると、その直前の処で調整とも見るべき操作の施されていることが看取される。先ず、第十一番目の張付に「十一之十二」、第十二番目には「十三」として、本文の実質よりも張付を先行させていることが見出される。新增説文本では本文を増したにも関わらず、毎半張に一行を増したた

めに増修分が吸収され、無修一〇行本に比べて、この箇処の前後までに約一張分を減じていたのである。そのまま進行したとすれば、もとは「十五」と張付けされていた「堵」以下の本文を有する部分が第十四番目に相当して張付がずれてしまうので、この操作が加えられたものと思われる。しかし張付を一張分跳躍させても、本文上にはかえって、若干の不足を生じてしまう。そこで本版には、この後「十一之十二」から「十四」張の間に、行数の不等を勘案しながら『説文』等の増補を加減し、「十五」の首に行款の合致するよう巧みに調節を施したのである。このことは、分業のために屢々行頭の文字を合せてある増修の在り方と同質であり、そうした顧慮の上に、同版の中で新增説文本からもとの無修本へと、一見無理なく接属させたというのが本版の実情である。

ハ、元統版諸本との関係

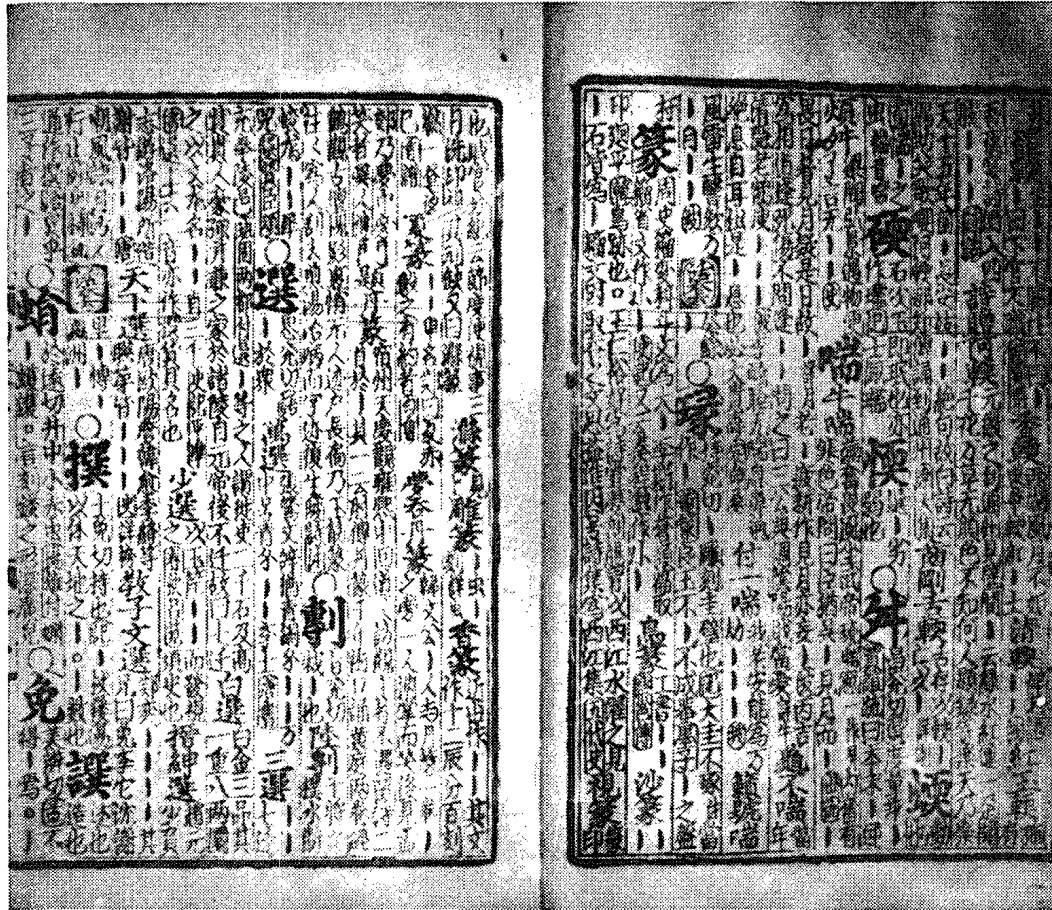
それにしても、本版では一体何故に、この第十巻途中から第十五巻途中までの間に『説文』を増入しなかったのであろうか。単純に増入作業の煩を避けて、中程の巻には省力したと考える

べきであらうか。しかし張付に手を加えてまで無修一〇行本との接属を図ったのであるから、そこに何等かの必然があった可能性も否定できない。そこで次に、新增説文本から連続するこの無修一〇行の部分に目を転じて行きたい。先ず当該版本中の無修の部分と、純粹な無修本諸版とを比較していくと、これらは基本的には別版と判ぜられる。その本文系統について略説すれば、元元統二年刊本を底本として、底本に墨格の文字については独自に文字を補ったもので、僅かに底本の誤刻を改正した箇処もあった。但し第十五巻など一部に、元統版補刻本墨格の校改と見なければならぬ箇処もある。その底本は前述〔明洪武八年序〕刊本や〔朝鮮初期〕刊本と同様のものであったと考えたい。こうした本文の情況は、実は無修一〇行の部分だけでなく、『説文』等を補った箇処を除いて考えれば、全巻を通じて認めることができる。このことから、本版に於ける本文、款式の変化は、途中に別系統の底本を取り合せ接ぎ足したために起こったことではなく、専ら『説文』等の増入を加える措置を中断したことに基づく現象と確認することができる。つまり本版は、無修の元統版を底本とする翻版で、巻首より『説文』を増入して行ったが、途中にはこれを省した本文と認められる。

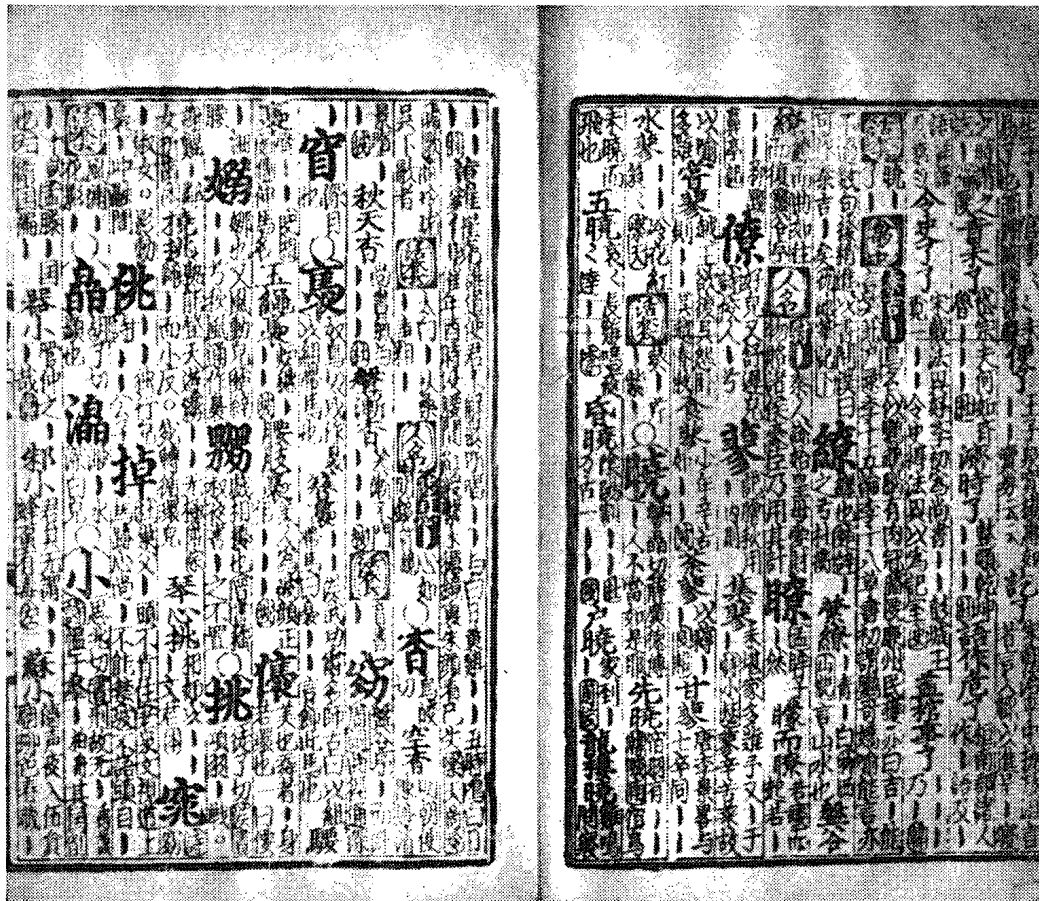
そして本版中の無修一〇行の部分をも更に注視していくと、驚くべきことに、僅かではあるがこの間の数張は、他の部分でも底本である所の元統版そのものと、全くの同版関係である事実が見出される。無論これも特定の伝本に見られる現象ではなく、諸本を通じて認められる事柄である。この点を基に考えると、実のところ本版は、一種の元統版補刻本と位置付けることが可能なのである。しかしながらそうになると、前稿に解題し、又本稿(一)章にも遺漏を補ったように、全巻無修本の中にも元統版に大量の補刻を加えた諸伝本を存することが確認されるから、そうした諸本と本版との関係の如何が問われることとなる。兩種伝本に即て元統版原刻部分の板木の状態を比較してみると、一見して、全巻本文無修の補刻本よりも当該新增説文中中の原刻部分の方が著しい磨滅を呈し、印出の順では全巻無修本の方が先行するものように思われる。このことからすると本版は、従前の元統版補刻本の延長上に位置付けられるものであろうか。通常の補刻は、原版の摩耗や破損に従って痛みの甚しい箇処を中心に新版を配して行き、これが数段階に互って加えられたとすると、印出の時点が降るに従って補刻の張数を増して、後修本、通修本等と弁別される体のものであろう。こ

の場合、前回に補刻の版は次の補刻印出以降にも保存されていくのが一般と思われる。しかし本書に於ける全巻無修の補刻本と本版との関係はそのようなものでなく、両者共に元統版原刻の部分を含んでいるにも関わらず、補刻新雕の部分については全くの別版を配し、原刻部分の残存情況も一方的に減じて行く形ではないなど、両者の関係は実に複雑な様相を示している。

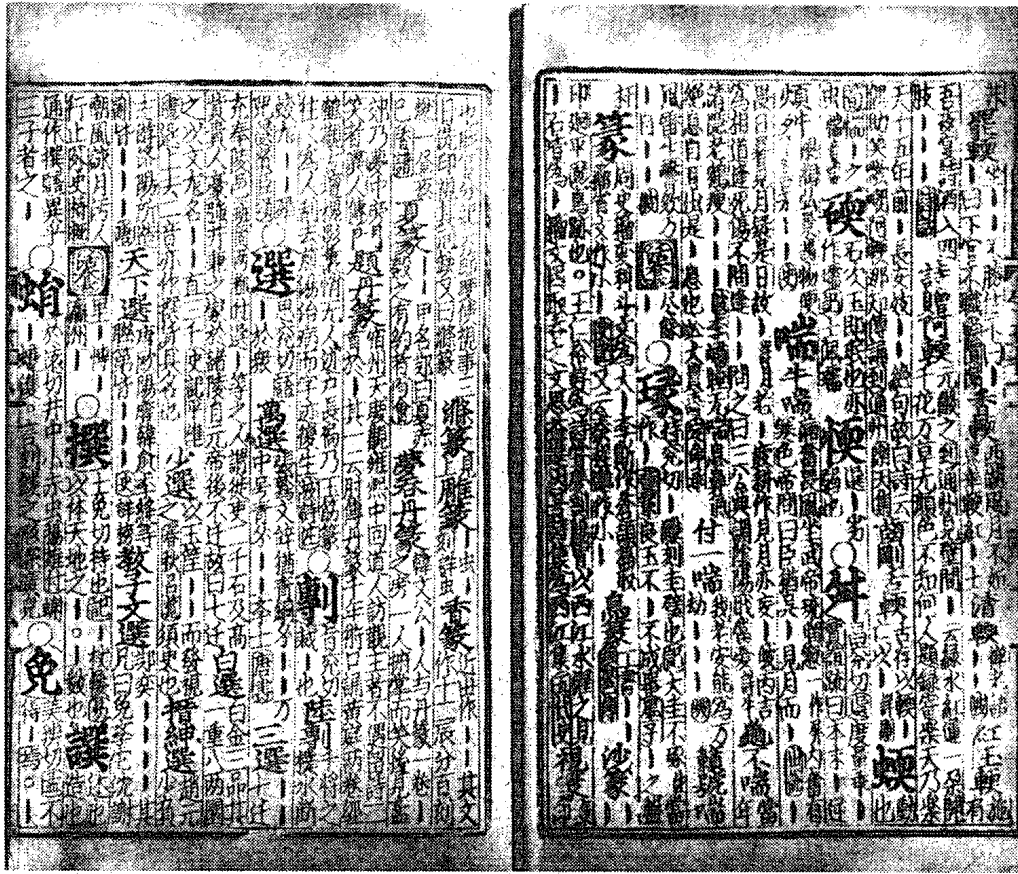
次に関係図版及び、第十巻から第十五巻に至る間とその前後の巻の補刻情況を、a. 元統二年刊本後修本、b. 同通修本、c. 当該〈元至正十六年刊〉新增説文本の三者について対照、表示したい。表中、左から巻序数、張序数とa、b、cの版刻情況を示し、●を以て元統版原刻部分を、○を以て同後修時補刻部分を、□を以て同通修時補刻部分を、△を以て〈元至正十六年刊〉本補刻部分を(以上は本文無修一〇行の部分)、一を以て同『説文』増入一一行の部分である旨を標記した。×は、参照の伝本に欠くものである。なおaについては國學院大学附属図書館蔵本、bは大東急記念文庫蔵本並に京都府立総合資料館蔵本、cは京都大学附属図書館蔵本に基づいて作表した。



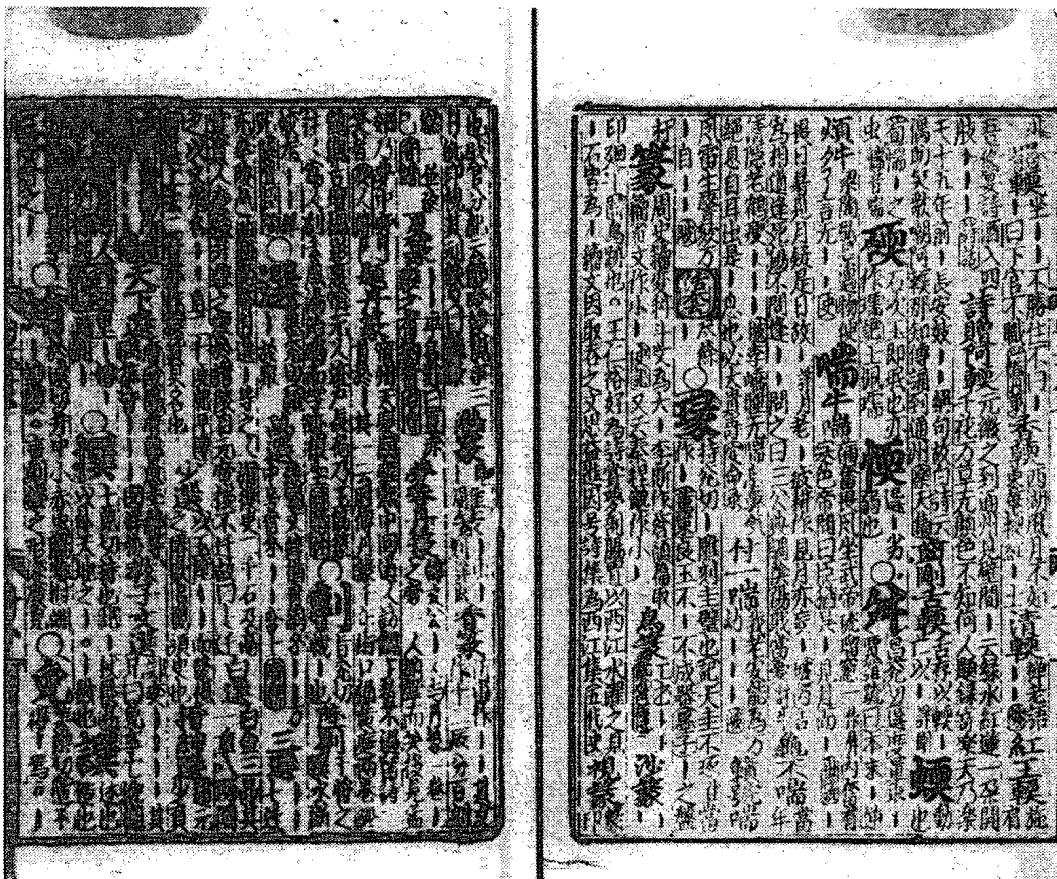
元統2年梅溪書院刊原刻本・第11卷第10-11張
〈市立米沢図書館蔵〉



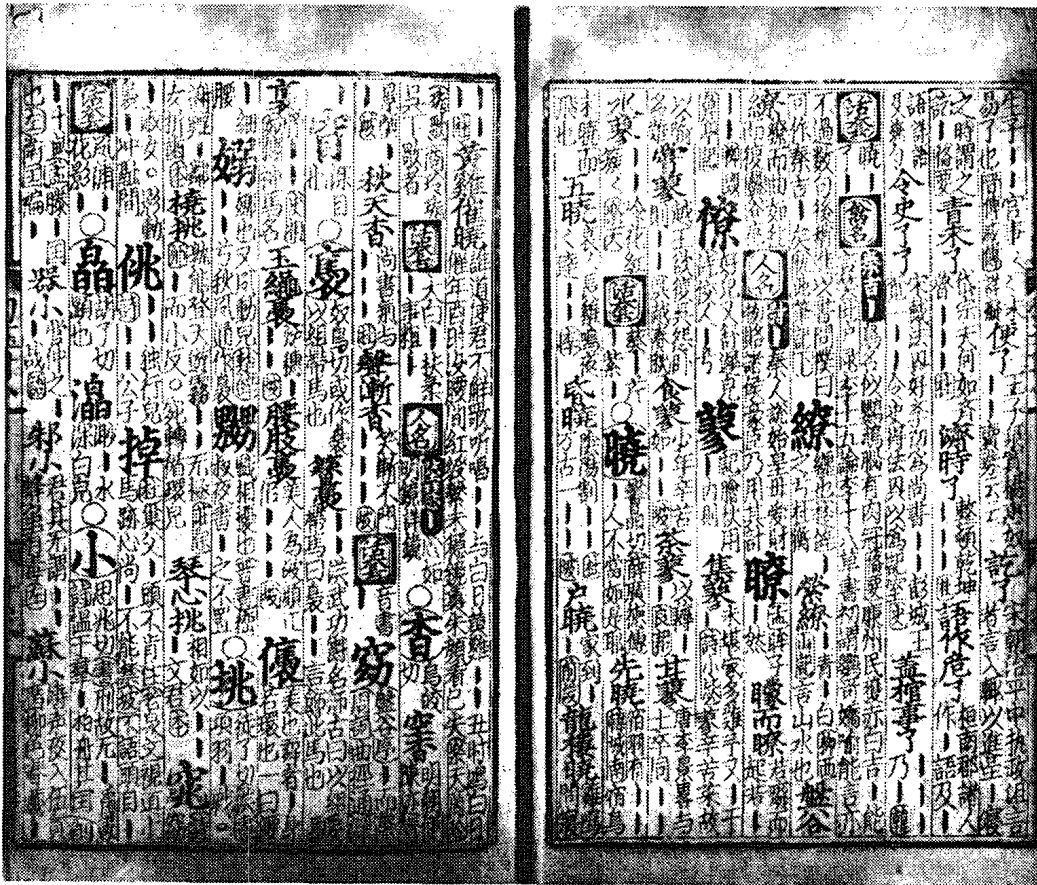
同・第11卷第12-13張
〈市立米沢図書館蔵〉



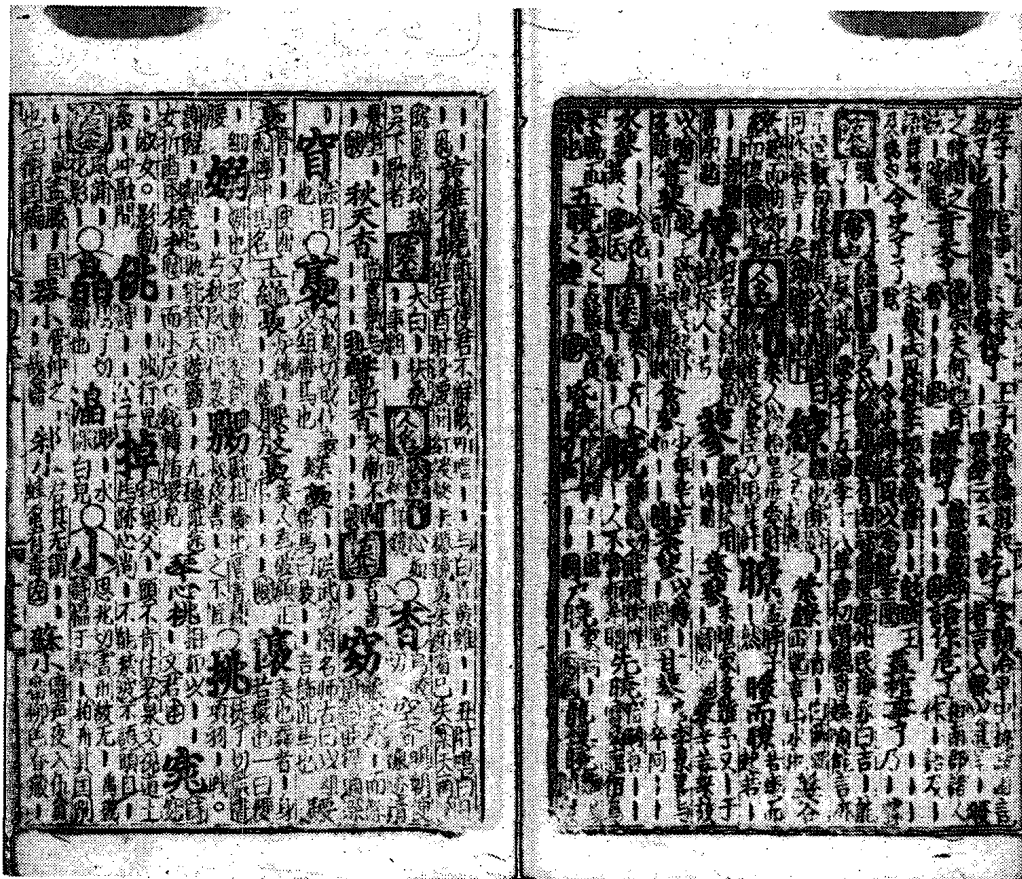
元統2年梅溪書院刊本・第11卷第10-11張
 〈左：逋修時補刻部、右：原刻部〉
 〈京都府立総合資料館蔵〉



〈至正16年日新堂刊〉本・同
 〈左：元統版原刻部、右：補刻部〉
 〈京都大学附属図書館蔵〉



元統2年梅溪書院刊本・第11卷第12-13張
 (左：後修時補刻部、右：通修時補刻部)
 〈京都府立総合資料館蔵〉



〈至正16年日新堂刊〉本・同
 (左：補刻部、右：元統版原刻部)
 〈京都大学附属図書館蔵〉

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 12 | 1 | ○ | ○ | △ |
| | 2 | ○ | ○ | △ |
| | 3 | ○ | ○ | △ |
| | 4 | ○ | ○ | △ |
| | 5 | ● | ● | △ |
| | 6 | ● | ● | △ |
| | 7 | ○ | ○ | △ |
| | 8 | ○ | ○ | △ |
| | 9 | ● | ● | △ |
| | 10 | ● | ● | △ |
| | 11 | ● | ● | △ |
| | 12 | ○ | ○ | △ |
| | 13 | ○ | ○ | △ |
| | 14 | ○ | ○ | △ |
| | 15 | ● | ● | △ |
| | 16 | ● | ● | △ |
| | 17 | ○ | ○ | △ |
| | 18 | ○ | ○ | △ |
| | 19 | ○ | ○ | △ |
| | 20 | ○ | ○ | △ |
| | 21 | ● | ● | △ |
| | 22 | ● | ● | △ |
| | 23 | ● | ● | △ |
| | 24 | ● | ● | △ |
| | 25 | ○ | ○ | △ |
| | 26 | ○ | ○ | △ |
| | 27 | ● | ● | △ |
| | 28 | ● | ● | △ |
| | 29 | ● | × | △ |
| | 30 | ● | ● | △ |
| | 31 | ● | □ | △ |
| | 32 | ● | □ | △ |
| | 33 | ● | ● | △ |
| | 34 | ● | ● | △ |
| | 35 | ● | ● | △ |
| | 36 | ● | ● | △ |
| | 37 | ○ | ○ | △ |
| | 38 | ○ | ○ | △ |
| | 39 | ○ | ○ | △ |
| | 40 | ● | ● | △ |
| | 41 | ○ | ○ | △ |
| | 42 | ● | □ | ● |
| | 43 | ● | □ | ● |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 11 | 1 | ● | □ | △ |
| | 2 | ● | □ | △ |
| | 3 | ● | □ | △ |
| | 4 | ● | □ | △ |
| | 5 | ● | ● | △ |
| | 6 | ● | ● | △ |
| | 7 | ● | ● | △ |
| | 8 | ● | ● | △ |
| | 9 | ● | ● | △ |
| | 10 | ● | ● | △ |
| | 11 | ● | □ | ● |
| | 12 | ● | □ | ● |
| | 13 | ○ | ○ | △ |
| | 14 | ○ | ○ | △ |
| | 15 | ● | □ | △ |
| | 16 | ● | □ | △ |
| | 17 | ● | □ | △ |
| | 18 | ● | □ | △ |
| | 19 | ● | ● | △ |
| | 20 | ○ | ○ | △ |
| | 21 | ● | ● | △ |
| | 22 | ● | ● | △ |
| | 23 | ● | ● | △ |
| | 24 | ● | ● | △ |
| | 25 | ○ | ○ | △ |
| | 26 | ○ | ○ | △ |
| | 27 | ● | ● | △ |
| | 28 | ● | ● | △ |
| | 29 | ● | □ | ● |
| | 30 | ● | □ | ● |
| | 31 | ● | ● | △ |
| | 32 | ● | ● | △ |
| | 33 | ● | ● | △ |
| | 34 | ● | ● | △ |
| | 35 | ● | × | △ |
| | 36 | ○ | ○ | △ |
| | 37 | ○ | ○ | △ |
| | 38 | ● | ● | △ |
| | 39 | × | ● | △ |
| | 40 | ● | ● | △ |
| | 41 | ○ | ○ | △ |
| | 42 | ○ | ○ | △ |
| | 43 | ● | ● | △ |
| | 44 | ● | ● | △ |
| | 45 | ● | □ | △ |
| | 46 | ● | □ | △ |
| | 47 | ● | □ | △ |
| | 48 | ● | □ | △ |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 10 | 1 | ○ | ○ | — |
| | 2 | ○ | ○ | — |
| | 3 | ○ | ○ | — |
| | 4 | ○ | ○ | — |
| | 5 | ○ | ○ | — |
| | 6 | ○ | ○ | — |
| | 7 | ○ | ○ | — |
| | 8 | ○ | ○ | — |
| | 9 | ○ | ○ | — |
| | 10 | ○ | ○ | — |
| | 11 | ○ | ○ | — |
| | 12 | ○ | ○ | — |
| | 13 | ○ | ○ | — |
| | 14 | ○ | ○ | — |
| | 15 | ○ | ○ | △ |
| | 16 | ○ | ○ | △ |
| | 17 | ○ | ○ | △ |
| | 18 | ○ | ○ | △ |
| | 19 | ○ | ○ | △ |
| | 20 | ○ | ○ | △ |
| | 21 | ● | □ | △ |
| | 22 | ● | □ | △ |
| | 23 | ○ | ○ | △ |
| | 24 | ○ | ○ | △ |
| | 25 | ● | ● | △ |
| | 26 | ● | ● | △ |
| | 27 | ● | ● | △ |
| | 28 | ● | ● | △ |
| | 29 | ○ | ○ | △ |
| | 30 | ○ | ○ | △ |
| | 31 | ● | ● | △ |
| | 32 | ● | ● | △ |
| | 33 | ○ | ○ | △ |
| | 34 | ○ | ○ | △ |
| | 35 | ● | ● | △ |
| | 36 | ● | × | △ |
| | 37 | ● | □ | △ |
| | 38 | ● | □ | △ |
| | 39 | ● | ● | △ |
| | 40 | ● | ● | △ |
| | 41 | ● | ● | △ |
| | 42 | ● | ● | △ |
| | 43 | ● | ● | △ |
| | 44 | ● | ● | △ |
| | 45 | ● | ● | △ |
| | 46 | ● | ● | △ |
| | 47 | ● | ● | △ |
| | 48 | ● | ● | △ |
| | 49 | ● | □ | ● |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|---|----|---|---|---|
| 9 | 1 | ○ | ○ | — |
| | 2 | ○ | ○ | — |
| | 3 | ○ | ○ | — |
| | 4 | ○ | ○ | — |
| | 5 | ○ | ○ | — |
| | 6 | ○ | ○ | — |
| | 7 | ○ | ○ | — |
| | 8 | ○ | ○ | — |
| | 9 | ○ | ○ | — |
| | 10 | ○ | ○ | — |
| | 11 | ○ | ○ | — |
| | 12 | ○ | ○ | — |
| | 13 | ○ | ○ | — |
| | 14 | ○ | ○ | — |
| | 15 | ○ | ○ | — |
| | 16 | ○ | ○ | — |
| | 17 | ○ | ○ | — |
| | 18 | ○ | ○ | — |
| | 19 | ○ | ○ | — |
| | 20 | ○ | ○ | — |
| | 21 | ○ | ○ | — |
| | 22 | ○ | ○ | — |
| | 23 | ○ | ○ | — |
| | 24 | ○ | ○ | — |
| | 25 | ○ | ○ | — |
| | 26 | ○ | ○ | — |
| | 27 | ○ | ○ | — |
| | 28 | ○ | ○ | — |
| | 29 | ○ | ○ | — |
| | 30 | ○ | ○ | — |
| | 31 | ○ | ○ | — |
| | 32 | ○ | ○ | — |
| | 33 | ○ | ○ | — |
| | 34 | ○ | ○ | — |
| | 35 | ○ | ○ | — |
| | 36 | ○ | ○ | — |
| | 37 | ○ | ○ | — |
| | 38 | ○ | ○ | — |
| | 39 | ○ | ○ | — |
| | 40 | ○ | ○ | — |
| | 41 | ○ | ○ | — |
| | 42 | ○ | ○ | — |
| | 43 | ○ | ○ | — |
| | 44 | ○ | ○ | — |
| | 45 | ○ | ○ | — |
| | 46 | ○ | ○ | — |
| | 47 | ○ | ○ | — |
| | 48 | ○ | ○ | — |
| | 49 | ○ | ○ | — |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 16 | 1 | ○ | ○ | — |
| | 2 | ○ | ○ | — |
| | 3 | ○ | ○ | — |
| | 4 | ○ | ○ | — |
| | 5 | ○ | ○ | — |
| | 6 | ○ | ○ | — |
| | 7 | ○ | ○ | — |
| | 8 | ○ | ○ | — |
| | 9 | ○ | ○ | — |
| | 10 | ○ | ○ | — |
| | 11 | ○ | ○ | — |
| | 12 | ○ | ○ | — |
| | 13 | ○ | ○ | — |
| | 14 | ○ | ○ | — |
| | 15 | ● | ● | — |
| | 16 | ● | ● | — |
| | 17 | ● | ● | — |
| | 18 | ● | ● | — |
| | 19 | ● | ● | — |
| | 20 | ● | ● | — |
| | 21 | ● | ● | — |
| | 22 | ● | ● | — |
| | 23 | ● | × | — |
| | 24 | ● | × | — |
| | 25 | ● | × | — |
| | 26 | ● | ● | — |
| | 27 | ● | ● | — |
| | 28 | ● | ● | — |
| | 29 | ● | ● | — |
| | 30 | ● | ● | — |
| | 31 | ● | ● | — |
| | 32 | ● | ● | — |
| | 33 | ● | ● | — |
| | 34 | ● | ● | — |
| | 35 | ● | ● | — |
| | 36 | ● | ● | — |
| | 37 | × | × | — |
| | 38 | × | × | — |
| | 39 | ● | ● | — |
| | 40 | ● | ● | — |
| | 41 | ● | ● | — |
| | 42 | ● | ● | — |
| | 43 | ● | ● | — |
| | 44 | ● | ● | — |
| | 45 | ● | ● | — |
| | 46 | ● | ● | — |
| | 47 | ● | ● | — |
| | 48 | ● | ● | — |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 15 | 1 | ○ | ○ | △ |
| | 2 | ○ | ○ | △ |
| | 3 | ● | ● | △ |
| | 4 | ● | ● | △ |
| | 5 | ● | ● | △ |
| | 6 | ● | ● | △ |
| | 7 | ○ | ○ | △ |
| | 8 | ○ | ○ | △ |
| | 9 | ○ | ○ | △ |
| | 10 | ○ | ○ | △ |
| | 11 | ● | ● | △ |
| | 12 | ● | ● | △ |
| | 13 | ● | ● | △ |
| | 14 | ● | ● | △ |
| | 15 | ● | ● | △ |
| | 16 | ● | ● | △ |
| | 17 | ● | ● | △ |
| | 18 | ● | ● | △ |
| | 19 | ● | ● | △ |
| | 20 | ● | ● | △ |
| | 21 | ○ | ○ | △ |
| | 22 | ○ | ○ | △ |
| | 23 | ● | ● | △ |
| | 24 | ● | ● | △ |
| | 25 | ○ | ○ | △ |
| | 26 | ○ | ○ | △ |
| | 27 | ○ | ○ | △ |
| | 28 | ○ | ○ | △ |
| | 29 | ○ | ○ | △ |
| | 30 | ○ | ○ | △ |
| | 31 | ○ | ○ | △ |
| | 32 | ○ | ○ | △ |
| | 33 | ○ | ○ | △ |
| | 34 | ○ | ○ | △ |
| | 35 | ○ | ○ | — |
| | 36 | ○ | ○ | — |
| | 37 | ○ | ○ | — |
| | 38 | ○ | ○ | — |
| | 39 | ○ | ○ | — |
| | 40 | ○ | ○ | — |
| | 41 | ○ | ○ | — |
| | 42 | ○ | ○ | — |
| | 43 | ○ | ○ | — |
| | 44 | ○ | ○ | — |
| | 45 | ○ | ○ | — |
| | 46 | ○ | ○ | — |
| | 47 | ● | ● | — |
| | 48 | ● | × | — |
| | 49 | ○ | ○ | — |
| | 50 | ○ | ○ | — |
| | 51 | ○ | ○ | — |
| | 52 | ○ | ○ | — |
| | 53 | ○ | ○ | — |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 14 | 1 | ● | ● | △ |
| | 2 | ● | ● | △ |
| | 3 | ● | × | △ |
| | 4 | ● | × | △ |
| | 5 | ● | ● | △ |
| | 6 | ● | ● | △ |
| | 7 | ● | ● | △ |
| | 8 | ● | ● | △ |
| | 9 | ● | ● | △ |
| | 10 | ● | ● | △ |
| | 11 | ● | ● | △ |
| | 12 | ● | ● | △ |
| | 13 | ● | ● | △ |
| | 14 | ● | ● | △ |
| | 15 | ● | ● | △ |
| | 16 | ● | ● | △ |
| | 17 | ● | ● | △ |
| | 18 | ● | ● | △ |
| | 19 | ● | ● | △ |
| | 20 | ● | ● | △ |
| | 21 | ● | ● | △ |
| | 22 | ● | ● | △ |
| | 23 | ● | ● | △ |
| | 24 | ● | ● | △ |
| | 25 | ● | ● | △ |
| | 26 | ● | ● | △ |
| | 27 | ● | ● | △ |
| | 28 | ● | ● | △ |
| | 29 | ● | ● | △ |
| | 30 | ● | ● | △ |
| | 31 | ● | ● | △ |
| | 32 | ● | ● | △ |
| | 33 | ● | ● | △ |
| | 34 | ● | ● | △ |
| | 35 | ● | ○ | △ |
| | 36 | ○ | ○ | △ |
| | 37 | ○ | ○ | ● |
| | 38 | ● | ● | △ |
| | 39 | ● | ● | △ |

| 卷 | 張 | a | b | c |
|----|----|---|---|---|
| 13 | 1 | ○ | ○ | △ |
| | 2 | ○ | ○ | △ |
| | 3 | ● | ● | △ |
| | 4 | ● | ● | △ |
| | 5 | ○ | ○ | △ |
| | 6 | ○ | ○ | △ |
| | 7 | ● | ● | △ |
| | 8 | ● | ● | △ |
| | 9 | ● | ● | △ |
| | 10 | ● | ● | △ |
| | 11 | ● | ● | △ |
| | 12 | ● | ● | △ |
| | 13 | ● | ● | △ |
| | 14 | ● | ● | △ |
| | 15 | ○ | ○ | △ |
| | 16 | ○ | ○ | △ |
| | 17 | ● | □ | △ |
| | 18 | ● | □ | △ |
| | 19 | ● | ● | △ |
| | 20 | ● | ● | △ |
| | 21 | ○ | ○ | △ |
| | 22 | ○ | ○ | △ |
| | 23 | ● | □ | △ |
| | 24 | ● | □ | △ |
| | 25 | ○ | ○ | △ |
| | 26 | ○ | ○ | △ |
| | 27 | ○ | ○ | △ |
| | 28 | ○ | ○ | △ |
| | 29 | ● | □ | △ |
| | 30 | ● | □ | △ |
| | 31 | ● | ● | △ |
| | 32 | ● | ● | △ |
| | 33 | ○ | ○ | △ |
| | 34 | ○ | ○ | △ |
| | 35 | ○ | ○ | △ |
| | 36 | ○ | ○ | △ |
| | 37 | ○ | ○ | △ |
| | 38 | ○ | ○ | △ |
| | 39 | ○ | ○ | △ |
| | 40 | ○ | ○ | △ |
| | 41 | ○ | ○ | × |
| | 42 | ○ | ○ | △ |
| | 43 | ○ | ○ | △ |
| | 44 | ○ | ○ | △ |
| | 45 | ○ | ○ | △ |
| | 46 | ○ | ○ | △ |
| | 47 | ● | ● | △ |
| | 48 | ● | ● | △ |
| | 49 | ○ | ○ | △ |
| | 50 | ○ | ○ | △ |
| | 51 | ○ | ○ | △ |
| | 52 | ○ | ○ | △ |
| | 53 | ● | □ | △ |
| | 54 | ● | □ | △ |
| | 55 | ● | □ | △ |
| | 56 | ● | □ | △ |
| | 57 | ● | ● | △ |
| | 58 | ● | ● | △ |

この表から幾つかの偏向を読み取ることができる。先ず〈元至正十六年刊〉本に元統版原刻部(●)を存するのは極少数で、太枠を以て示した十一・四十九、十一・十一・十二、二十九・三十、十二・四十二・四十三、十四・三十七の、都合八張に止まる。そしてこの原刻部の出現分布のみを取出して言えば、b・cの原刻部は、十四・三十七を唯一の例外として、aのそれにほぼ包含される関係にあり、その一方でbとcは全く原刻部(●)を共有しない(図版三―五参照)。本稿ではこの現象を次のように解する。元統版の後修本(a)が印行されてから通修本(b)が印行されるまでの間に、後修本(a)中に残されていた原刻部(●)を、通修本(b)と〈元至正十六年刊〉本(c)とで分け合ったのである。このことは恐らく次のように換言されよう。即ち、梅溪書院もしくはその版の継承者は、原刻本を補刻後修した後に、極一部の残存原刻部を日新堂に譲渡したのであり、それによる欠落部分を更に補刻したため、通修本の状態を生じたのである。もしこれを是とすれば、cに●の箇処では必ずbは□、即ち元統版通修時補刻部となっていることが納得されよう。ただbに□である場合に必ずcが●となっているわけではなく、cは△、即ち〈元至正十六年刊〉本独自

の補刻部となっている場合も多く見られるが、これは、一部の原版を継承した日新堂に於いても、原版をそのまま使用した場合と、新たに補刻した場合とがあつたからだと思われる。第一、元統版通修時の新たな補刻は、全巻を通じても第十―十五巻以外には全く見られず、後修時の版(●又は○)をそのまま使用していることから確かめられよう。唯一問題となるのは十四―三十七の場合であるが、この張では補刻後にも原版を存していたのだと解されるのではなからうか。上記を是とすれば、元統版に第二次の補刻を生じた理由は、日新堂への一部板木の移譲にあり、この経緯から、通常元至正十六年日新堂刊本と目されている当該の版本は、元統版を中心に記すと、全巻一〇行の通修本と並行の関係にある、元統版別修本と考えることができる。そうした観点から、この版本を無修一〇行本の諸版中に位置付けるなら、前章(三)の後に示した関係模式図の末尾に附して、次のように補うべきであろう。

又 通修本(全巻一〇行・本文無修本)

別修本Ⅱ元至正十六年刊本(新增説文本)

いわゆる元至正十六年刊本中に、僅かに元統版の原刻部を存する理由、即ちそれらの数張が日新堂に移された事情については、依然として明瞭でない。ただ当該版本には大部分について補刻を実行していることからすれば、やはりこの原刻部を使用して印行する必然があったと見るべきではなからうか。現存版本の記述を離れて想像を加えることが許されるなら、そこには然るべき著作権の移譲に類する経緯が伏在しているのではないかと思われるが、現在までこの点を明らかにすることができない。しかし従来別系統と思われた本文が、版刻の上では連続する実情に立つものであったことは、十分考慮に加えて置くべきであろう。当面、元統版原刻部の存在を起点として当該版本の略説を試みれば、第十―十五巻中の一部の元統版を保有した日新堂では、その数張を活かす形での元統版の補刻改修を企てたが、それは既成の本文に『説文解字』の記事を加えて「新增説文」と銘打つ新案を伴い、また若干の校改を施したものであった。しかしその増修の手続きは学問的厳正に立つものでなく、分業のために半面一一行とした上、『古今韻会舉要』の注から『説文』等の引用を孫引きする体の、速成の増修であった。この措置は第一巻から第十巻の途中、又第十五巻の途中から第二十巻

の末尾までの部分には均質に施された。しかし原版を活かすために、第十巻の途中から巧みに増修を調節してもとの款式に合せ、その第十五張からはもとの行款に完全に一致させて原刻部分に接属させ、第十五巻第二十四張までは半面一〇行の款式を有することとし、その結果として半面一一行本中に一〇行の数巻を雜えた現存本の姿を生じたものであろう。又至正十六年（二三五六）と思われる本版の成立時点を元統版補刻本との先後関係の中に置くと、元統版の後修はそれ以前、同じく通修はほぼ同時期かそれ以降と判明して、元統版がおおよそ元末明初までその生命を保ったということも知られる。これは、元統版補刻本の直接の翻版である元至正二十八年（即ち明洪武元年）刊本の登場とほぼ交替する格好で、その板木自体は命脈を終えたのだと解することができる。その他、こうした成版事情を有する〈元至正十六年刊〉本は、元来近親関係にある無修一〇行本諸版の成立についても、校讎改正という形でその本文形成に参与した。具体的には〔明洪武八年序〕刊本や〔明前期〕刊本、朝鮮刊刻の諸版本の本文校改に際して、この新增説文本が直接間接の影響を及ぼし、無修本の展開についても新增説文本の成立と流布が欠かせない要件となったものである。

元統二年の梅溪書院の版刻に淵源する『韻府群玉』の諸版は、元明を通じ、日本や朝鮮を含む諸地域に行われ、諸版間相互の干渉を起こし、又独自の校讎や改編を加え乍ら、複雑に展開していった。その背景となった版刻の实情や出版書肆の活動について窺い知ることは、直接に示唆する資料に乏しく、如何にも条件の限られた難題ではある。しかし当時、学問情況の根底を形成していたのは、これら諸版本の成立と流布であつて、現実にそうした版刻の営為や学問の痕跡が、版本自体に刻み付けられ、証言を伝えている場合も数多い。やはり今日に遺された諸伝本の印面や紙葉、又相互の異同の検証によってその大概を思量することにも、なお一定の可能性を遺しているように思われる。本稿ではそうした観点から、前稿の補正を目指し考証を重ねてきたが、その過程で、当の元統版補刻印行の途上に、新增説文本の産み出されたことを明らかにした。同本の始発となる至正十六年の日新堂の版刻は、単に別版の開刻というよりも手の込んだ補刻と称すべき性質のものであつたが、現実にはその流行が無修本諸版にも作用したし、何よりも無修本に代わつて世上に受け容れられ、次第にその地位を奪う結果を招いた点で甚だ意義が大きかつた。そして、その交替の経過に『古今韻会

挙要』の関与したことは、この期の版刻の实情を如何にもよく象徴する事柄である。元来『韻府群玉』は、少なくともその市場に於いては、直前の時期に盛行を示していた『韻会』を強く意識して登場した。編者の陰時遇自身、本書序文に態々『韻会』の不備を挙げて本書の完備を謳い、その新案を誇つたものでもある。勿論『韻会』の刊刻者も無策であつたわけではなく、再三に互る修刻と印出によつて、明代に至るまで一版の命脈を保ち長らえたのであつたが、後発の『韻府』の盛行振りは、その版種や伝本の多さから見ても、遂に『韻会』を凌駕したと言つてよい。しかし因果は巡ると言うべきか、無修本『韻府』の板木を一部移譲した日新堂で開刻を企てた「新增説文」本とは、従来の批判に耐えて文字を増入した『韻会』後修本に依つて更にその注を増益したものであり、この新出本『韻府』の登場によつて、もとの無修本の流行は下火となり、その地位を譲つて市場から後退する結末となつたのである。かかる版刻の連鎖は、旺盛な営利出版の産物ではあるが、独り中国の現実であつたばかりでなく、その間断なく力強い波動は、遠く海外にも及んで朝鮮やわが国の学藝を規定し、その展開にも与つて大いに力があつたと見なければならぬ。

次稿には引続き又、この新增説文本系統の諸版、諸伝本について解題し、その一斑を窺うための料としたい。無修本の解題は、本稿を以て一区切りとしたいが、実際には拾遺すべき事柄も更にあるかと思われ、これについても逐次完備を図っていくものとする。

注

- (1) 前稿に於ける所在報告に「北京図書館」と記したものを、本稿では皆「中国国家図書館」と改めた。
- (2) マイクロフィルム閲覧による書物の各種法量は書影中に附随の尺に基づく計算値である。以下同。
- (3) 長澤規矩也氏「明初刊本五種」(『積翠先生華甲壽記念論集』昭和十七年八月・同記念会刊)、『長澤規矩也著作集』第三卷(昭和五十八年、汲古書院)に再録)、李国慶氏編『明代刊工姓名索引』(一九九八年、上海古籍出版社刊)参照。
- (4) 尾崎康氏『正史宋元版の研究』(昭和六十四年・汲古書院)参照。
- (5) 前稿に柳田征司氏「玉塵」の原典『韻府群玉』について(山田忠雄氏編『國語史學の爲に』昭和六十一・五、笠間書院、

『室町時代語抄物の研究』(平成十年・武蔵野書院)に追補再録)の当該版に関する記述を紹介し「第一巻の底本のみ新增説文本で」云々と記したのは、当方の誤読による。誌して訂正したい。

- (6) 川瀬一馬氏『五山版の研究』(昭和四十五年、A B A J) 四六四頁の本書の項目に掲げる布施卷太郎氏蔵本とは、当該の伝本を指すであろう。
- (7) この句、詩題未詳。欧陽修の「帰田録」下に「處士林逵居於杭州西湖之孤山。逋工筆畫、善爲詩。如「草泥行郭索、雲木叫鉤翰」頗爲士大夫所稱」と見える。
- (8) 柳田征司氏『詩学大成抄の国語学的研究 研究篇』(昭和四十九年・清文堂出版)並に本稿注(5)著書参照。
- (9) 抑も本書には同韻の内部も文字の声母によって分節され、反切注記はその同音字の首にしか示されていないのであるから、告文の「毎字音切之下」というのは実情に合わない。
- (10) 拙稿「元」刊本系『古今韻会举要』伝本解題——本邦中世期漢学研究のための——(『日本漢学研究』第一号・平成九年十一月)
- (11) その際「韻会」は勿論、他の韻書の名も「又」「一曰」等と隠蔽されている。本書本文中にこれらの書名が現れているのは、

増入部分ではなく、無修本に始めから引用されていた場合に限られる。

(12) 新增説文本の巻数と分韻、文字の掲出順は、無修本のそれと全く同じである。

(13) 注(5) 柳田氏著書

〔附記〕

本稿は平成十三・十四年度文部科学省科学研究費特定領域研究(A)

「東アジア出版文化の研究」に基づく成果の一部である。